

二葉亭四迷の一生

内田魯庵

青空文庫

二葉亭ふたばていの歿後ぼつご、坪内つばうち、西本両氏はかと謀はかつて故人の語学校
 時代の友人及び故人と多少の交誼こうぎある文壇諸名家の追憶また
 は感想を乞こい、集めて一冊として故人の遺靈に手向たむけた。そ
 の折諸君のまぢまぢの憶出おもいでを補うために故人の一生の輪廓
 を描いて巻後に附載したが、草卒の際序述しばしば先後し、
 かつ故人を追懐する感慨に失して無用の冗句かきを累ね、故人の
 肖像のデッサンとして頗すこぶる不十分であつた。即ち煩冗こころを去り
 補修を施こし、かつ更に若干の遺漏かきたを書足して再び爰こころに収録
 するは二葉亭四迷しめいの如何いかなる人であるかを世に紹介するため
 であつて、肖像画家としての私の技術を示すためではない。

かつ私が二葉亭と最も深く往来交互したのは『浮雲』うきぐも発行後数年を過ぎた官報局時代であつて幼時及び青年期を知らず、更に加うるに晩年期には互いに俗事に累わづらわされて往来漸ようやうく疎とく、臂ひじを把とつて深く語るの機会を多く持たなかつたから、二葉亭の親友の一人ではあるが、そのボスウエルとなるには最も親密に交際した期間が限られていた。

かつこの一篇は初めからデッサンのつもりで書いたゆえ、如何に改竄かいざん補修を加えてもデッサンは終ついにデッサンたるを免がれない。勿論もちろん二葉亭の文学や事業を批評したのではなく、いわば履歴書に註釈加えたに過ぎないので、平板なる記実にもし幾分たりとも故人の人物を想到せしむるを得たなら

この一篇の目的は達せられている。更に進んで故人の肉を描き血を流動せしめて全人格を躍動せしめようとするには勢い内面生活の細事にまでも深く突入しなければならぬから、生前の知友としてはかえって能くしがたい私情がある。故人の瑜瑕並び蔽わざる全的生活は他日再び伝うる機会があるかも知れないが、今日はマダその時機でない。かつ自ずから別に伝うる人があろう。本篇はただ僅かに故人の一生の輪廓を彷彿せしむるためのデッサンたるに過ぎないのである。下記は大正四年八月の旧稿を改竄補修をしたもので、全く新たに書直し、あるいは書足した箇所もあるが、大体は惣て旧稿に由る。

一 生いたちから青年まで

二葉亭が明治二十二年頃自ら手録した生いたちの記がある。未
完成の断片であるが、その幼時を知るにはこれに如くものなな
ろう。曰く、^{いわ}

余は元治元年二月二十八日を以て江戸市ヶ谷合羽坂尾^{いちがやかっぱざかびしゆ}
州分邸^うに生れたり。父にておはせし人はその頃年三十を越
え給はず、また母にておはせし人もなほ若かりしかば、さの
みは愛し給ひしとも聞かざれど、祖母なる人のいとめでいつ
くしみ給ひて、父の叱り給ふ時は機嫌よろしからぬほどなれ^{しか}

ば、おのづから氣随におひたてり。されど小児の時余の尤も
おそれたるは父と家に蔵する鍾馗しょうきの画像なりしとぞ。

幼なかりしころより叨みだりに他人に親したまず、いはゆる人みし
りをせしが、親しくゆきかよへる人などにはいと打解けてま
せたる世辞などいひしと叔母おばなる人常にの給ひき。

六歳のころ父なる人自ら手本をものして取らし給ひつ。さ
れど習字よりは画を好みて、夜は常に木偶でくの形など書き散ら
して楽しみしが、ただみづから画くのみならず、絵巻物（註、
錦絵の事なり）など殊ことの外よろこびて常に玩あそべりとか。

画の外余の尤もつとも好みしは昔物語りにて、夜に入ればいつも
祖母なる人の袖引きゆるがして舌切雀したきりすずめのはなしし玉へと

せがみしといふ。

されどこれらは幼き時のことなれば今は覚えなし。ただ祖母なる人の物語り給ひしを記せるのみなり。

上野戦争後諸藩引払ひの時余の一家は皆尾州へおもむきたれど、ただ父なる人のみはなほ留まりて江戸の邸を守り給へり。

尾州に到りてのちに初めて学に就けり。組外れに漢学塾ありたりしが、その門に入りて漢学を修めり。また余の叔父なる人にも就きて素読を修めり。藩に学あり、英仏両語を教授す。余またこれに入りて仏語を修めり。

余は常に学校に行くを樂みとせしが、学問するが面白きに

はあらで、学校にて衆童と遊戯嬉きし笑しょうするが面白きゆゑなり
き。

余のすめる近傍の児童は皆余の朋友なりき。但し何人も経
験したる事ならんが、余の朋友中年としたけたるもの二人ありた
り。件くだんの兩人相親しむ時は余らは皆その麾下きかに属してさまざ
まなる悪戯をして戯れしが兩人仲なかつたが違ちがひしたる時は余らもま
た仲間割れをせり。余は到つて臆病なりしかばかかる時は常
に兩人中余の尤おそも懼おそるる方に附したき随たがひて媚こびを獻じてその機嫌
を取れり。

余はかくの如く他人に對して臆病なりしかど、家人に對し
て大胆にていはゆる灣わん泊ぱくを極めたりき。余は甚はなだしき瘡かんし

性ようにて毎朝衣服を母なる人に着せてもらひしが、常に一度にては濟まず、何どこ処か氣持悪あしければ二、三度も着かへるを常とせるをもて、これに由よりて母なる人を苦くるめたる事もありき。

概していへば当時の余の心状は卑劣なりしなり。

以上はその全文である。取出でていうほどの奇はないが、二葉亭の一生を貫徹した潔癖、俗にいう氣難きむずかし屋の氣象と天才肌はだの「シャイ」、俗にいう羞恥はにかみ屋の面影おもかげが児供こどもの時から仄見ほのえておる。かつこの自伝の断片は明治二十二年ごろの手記であるが、自ら「当時の余の心状は卑劣なりしなり」と明らさまに書く処に二葉亭の一生鞭撻べんたつしてやまなかつた心の艱なやみが見えておる。

尾州から父に伴われて父の任地島根に行き、殆ほとんど幼時の大部

分を島根に暮した。その頃の父の同僚であつて、しゆくてつ叔姪、同様に親しくした鈴木老人その他の話に由ると、すこぶ頗る持余しの茶目であつたそうだ。軍人志願で、陸軍大将を終生の希望とし、乱暴して放屁するをえら豪いように思っていたと、二葉亭自身の口から聞いた。

二葉亭の伯父で今なお名古屋に健在する後藤老人は西南の役に招集されて、後に内相としてらつわん辣腕を揮つた大浦兼武（当時軍曹）の配下となつて戦つた人だが、西郷さいごう鼯負の二葉亭はこの伯父さんが官軍だというのが気に喰くわないで、度々伯父さんを捉つかまえては大議論をしたそうだ。二葉亭の東方問題の抱負は西郷の征韓論あたりからはいたい胚胎したらしい。こんな塩梅あんばいに児供の時分から少し變つていたので、二葉亭を可愛がつっていた祖母おばあさんは

「この子は金きん鰐つばさ指すか薦こも被るかだ、」と能く人に語つたそうだ。
 (金鰐指すか薦被るかというは大名となるか乞こ丐じきとなるかという
 意味の名古屋附近に行われる諺。)

十五歳の時、島根から上京して四谷の忍原横町の親戚おしはらよこちよう しんせきの
 家に寄食した。その時分もヤンチャン小僧で、竹馬の友たる山田
 美び妙みょうの追懐談に由ると、お神楽かぐらの馬鹿踊ばかおどりが頗る得意であつて、
 児供同士が集まると直ぐトツピキピを初めてヤンヤといわせたそ
 うだ。間もなく芝の愛宕下あたごしたの高谷塾たかたにに入塾した。高谷塾という
 は『日本全史』というかなり浩漭こうかんな大著述をしたその頃の一と
 癖ある漢学者高谷龍洲の家塾であつて、かなり多数の書生を集め
 て東京の重なる私塾の一つに数えられていた。大阪朝日の旧社員

の土屋大作や、今は故人となつた帝劇の座付作者の右田寅彦兄みぎたのぶひこ弟も同塾であつたそうだ。然るしかにイタズラ小僧の茶目の二葉亭は高谷塾に入塾すると不思議にわかに俄に打つて變つた謹直家となつて真ま面目じめに勉強するようになった。知らない顔の他人の中へ突き出されて、持もち前まえの羞恥はにかみ屋から小さくなつたのもあろうが、一つは今なら中学程度に当る東京の私塾の書生となつたので、俄に豪おとなくなつて大人びたのもあろう。

その時代、一番親しくしたは二葉亭の易えきざく簀しやム當時暹羅公使をしていた西源四郎と陸軍大尉で早世した永見松太郎の二人であつた。殊に永見は同時に上京した同郷人であるし、同じ軍人志願であつたからなお更深く交際した。然るに永見は首尾よく陸軍の試験に

合格したが、二葉亭はその頃からの強度の近視眼のため不合格となった。（永見はその後参謀部の有数な秀才と歌われていたが、惜しい事に大尉で若死わかじにしてしまった。福島大将と同時代であったそうだ。）二葉亭は運悪く最初の首途かどでに失敗やりそこなってしまうたが、首尾よく合格して軍人となっても狷介けんかい不羈ふきの性質わづらいが累かさねをなして到底長く軍閥に寄食していられなかつたろう。

その頃二葉亭は既に東亜の形勢を觀望して遠大の志を立て、他日の極東の風雲を予期して舞台の役者の一人となろうとしていた。陸軍を志願したのも、幼時は左とに右かくその頃では最早もはやただ軍服が着むなたいというような幼い希望ではなかつた。それ故に軍人志望が空むなしくなると同時に外交官を志ざして旧外国語学校の露語科に入

学した。その頃高谷塾以来の莫逆ばくげきたる西源四郎も同じ語学校の
 支那語科に在籍していたので、西は当時の露語科の教師古川常一
 郎の義弟であつたからなお更益ますます々々交誼を厚くした。その後間も
 なく西が外務の留学生となつて渡支してからも山海数千里を距へだて
 て二人は片時かたときも往復の書信を絶やさなかつた。その頃の二葉亭
 の同窓から聞くと、暇さえあると西へ遣やる手紙を書いていたそう
 で、その手紙がイツデモ国際問題に関する侃々かんかんがく 諤々がくの大
 議論で、折々は得意になつて友人に読んで聞かせたそうだ。二葉
 亭の露西亞語ロシアは日露の衝突を予想しての国家存亡の場合に活躍す
 るための準備として修められたのだから、「君は支那公使となれ、
 我は露国公使とならん」というが二人の青年の燃ゆる如き抱負で、

殆んど天下の英雄は使君しくんと操とのみの意気込であつた。二葉亭が死ぬまでも国際問題を口にしたのは決して偶然ではないので、マダ二十歳はたちになるかならぬかの青年時代から血を湧わかした希望であつたのだ。（二葉亭の歿後、或人が西を訪問してその頃の二葉亭の遺事を聞きたいといつたところが、西は頗すこぶる冷然として二葉亭とはホンの同窓というだけの通り一遍の浅い関係だからその頃の事は大抵忘れてしまつたといういたつて率そつ気ない挨拶あいさつだつたそ
うだ。御当人がそういう健忘性だから世間からも西という公使があつたかなかつたか今では全く忘れられている。）

明治十八年の秋、旧外国語学校が閉鎖され、一ツ橋の校舎には東京商業学校が木挽町こびきちょうから引越して来て、仏独語科の学生は高

等中学校に、露清韓語科は商業学校に編入される事になった。当時の東京商業学校というは本もと商法講習所と称し、主として商家の子弟を収容した今の乙種商業学校程度の頗る低級な学校だったから、士族気質かたぎのマダ失うせない大多数の語学校学生は突然の廃校命令に不平を勃ぼつ発ぱつして、何の丁稚学校てつちがという勢いで商業学校側を睥へい睨げいした。今ならこんな専制的命令が行われるはずもなく、そういう場合学生は聯合して示威運動でもする処だが、当時の学生は尚まだそういう政治運動をする考がなく、硬骨連てんでが各自てんでに思い思いに退校届を学校へ叩たたきつけて飛出してしまった。二葉亭もまたその一人で、一時は商業学校に学籍を転じたが、翌十九年一月、とうとう辛抱がまんが仕切れないで怩ふつ然ぜん袂もとを払はって退学してしまった。

最^もう二、三月辛抱すれば卒業出来るのだし、二葉亭は同学中の秀才だったから、そのまま欠席して試験を受けなくても免状を与えようという校長の内論もあつたが、気に喰わない学校の卒業証書を恩惠的に貰^{もら}う必要はないと、キビキビ跳^{はね}付けてパイと退学してしまつた。

が、この頓挫^{とんざ}が二葉亭の生涯の行程をこじらす基^{もと}いとなつたは争^あわれない。当時の商業学校の校長矢野次郎は二葉亭の才能^{おし}を惜んで度々校長室に招いて慰諭し、いよいよ学校を退学してからも身分上の心配をしてやろうとまで厚意を持つてくれた。が、不平で学校を飛出しながら校長の恩^{すが}に縋^{すが}るような所^ま為^ねは餓^{うえ}死^じしても二葉亭には出来なかつた。かつ露語科に入つた当初の志望こそ外

交官であつたが、語学の研究のため露西亞文学を涉獵し初してか
 ら何時の間にか露国思想の感化を受けると同時に、それまで潜在
 していた文学的興味、芸術的意識が俄に頭を擡上げて来て当初の
 外交官熱が次第に冷め、その時分は最早以前の東方策士形氣でな
 くなつていたから、矢野の厚意に縋つて官界なり実業界なりに飛
 込む氣にはなれなかつた。元來が軍人志願の漢学仕込で、岳武
 穆くや陸宣公に鍛きたえられていた上に、ヘルチエンやビエリンスキ
 ーの自由思想に傾倒して意氣鬱勃うつぽつとしていたから、一から十ま
 でが干涉好きの親分肌の矢野次郎の実業いってんぱり一天張の方針と相容れ
 るはずはなかつた。算盤玉そろばんだまから弾はじき出したら矢野のいう通りに
 温和おとなしくなつてゐる方が得策であつたかも知れないが、矢野が世話

を焼けば焼くほど、世話になるが利益と思えば思うほど益々反抗して、折角の矢野の厚意をピタリと跳付けて後あとあし足で蹴けつてしまつた。無論、学校を飛出してから何をするとあていう恃あてはなかつたが、この場合是非分別を考いとまえる違いとまもなく、一図に血氣に任して意地を貫いてしまつた。

二 春廼舎との握手

あたかもその頃であつた。坪内逍遙の処女作『書生氣質』しよせいかたぎが發行されて文学士春廼舎はるのやおぼろ隴にわかの名が俄にわかに隆々として高くなつたのは。 (『書生氣質』は初め清朝四号刷ずりの半紙十二、三枚ほどの小

冊として 神田明神下かんだみやうじんしたの晩青堂という書肆しよしから隔週一冊ずつ続
刊されたので、第一冊の発行は明治十八年八月二十四日であつた
。丁度政治が数年後の国会開設を公約されて休息期に入つて民
心が文学に傾き、リットンやスコットの翻譯小説が続出して歡迎
され、政治家の創作しきが頻りに流行して新らしい機運に向いていた
時であつたから、今の博士よりも遙はるかにヨリ以上重視された文学士
の肩書を署した春廼舎の新作は忽たちまち空前の人氣を沸騰し、堂々た
る文学士が指を小説に染めたという事は従来戯作視した小説の文
学的位置を重くもし、世間の好奇心を一層喚よびもした。その頃ま
では青年の青雲の希望は政治に限られ、下宿屋から直ちに参議と
なつて太政官たじやうかんに乗込もうというのが青年の理想であつた時代で

あつたから、天下の最高学府の出身者が春廼舎臚いという粹いきな雅号で戯作の真似まねをするというは弁護士まねの娘が女優になつたり、華族の冷飯ひやめしがキネマの興行師となるよりも一層意外で、『書生氣質』が天下を騒がしたのはその芸術的効果よりも実は文学士の肩書の威力であつた。

それ故世間は半信半疑で、初めはやはり政治家の小説と同じ一時の流行カブレで、堂々たる学士がマジメに小説家になろうとは誰も思わなかつた。ところが高田半峰たかだはんぼうが長々しい批評を書き、春廼舎もまた矢継やつぎ早はやに『小説神髓』（この頃『書生氣質』と『小説神髓』とドツチが先きだろつという疑問が若い読書子間にあるらしいが、『神髓』はタシカ早稲田わせだの機関誌の『中央學術雜

誌』に初め連載されたのが後に単行本となつたので、『書生氣質』以後であつた。〕から続いて『妹と背鏡いも すがみ』を発表し、スモレット、フィールディング、ドイツケンス、サツカレー等の英国小説家が
大文豪として紹介され、戯作の低位から小説が一足飛びに文明に
寄与する重大要素、堂々たる学者の使命としても恥かしくない立
派な事業に跳上つてしまつた。それまで政治以外に青雲の道がな
いように思つていた天下の青年はこの新らしい世界を発見し、俄
に目覚めたようにきゆうぜん 翕然として皆文学に奔はしつた。美妙や紅葉こうよう
が文学を以て生命とする志を立てたのも、動機は春廼舎の成功に
衝動されたのだ。

二葉亭はこれより先き語学校の科目としてゴンチャローフやゴ

ーゴリやレルモントフやドストエフスキー等の大文学を研究し、進んでビエリンスキー、ドブロリユーボフ、ヘルチエン等の論文集を耽たんどく読し、殊に深くビエリンスキーに傾倒していた。尤も半ば語学研究の必要のために外ならなかつたが、当時の語学校の教師グレーというがなかなかな文学家であつて、その露文学を講ずるや微に入り細に渉わたつて批評し、かつエロキューションに極めて巧妙で、身振みぶり声こわいろまじ色交りに手を振り足を動かし眼を剥むき首を掉ふつてゴンチャローフやドストエフスキーを朗読して聞かしたのが作中のシーンを眼前に彷彿せしめて、一ひ度たびグレーの講義を聞くものは皆語学の範囲を超こえてその芸術的妙趣を感得し、露西亞文学の熱心なる信者とならずにはいられなかつた。二葉亭もまたこの

一種の天才ある教師の指導を受けて何時いつとはなしに芸術的興味を長じ、進んで専門文人となるまでの断乎だんこたる決心は少しもなかったが、知らず識しらずに偶然文人の素地を作っていた。時も時、学校を罷やめて何をするという方角もなく、満腔まんこうの不平を抱いて放浪していた時、卒然としてこの文学勃興の機運に際会したは全く何かの因縁であつたろう。

当時の春廼舍臈の声望は旭きよくじつ日昇天の勢いで、世間の『書生氣質』を感歎するやあたかも凱旋がいせん將軍を迎うる如くであつた。が、世間が驚嘆したのは実は威力ある肩書のためであつて、その実質は生残りの戯作者流に比べて多少の新味はあつても決して余り多く価値するに足らなかつたのは少しく鑑賞眼あるものは皆認

めた。ましてや偉大なる露国文学の一とわたりを究めた二葉亭が何条肩書に嚇かされよう。世間が『書生氣質』や『妹と背鏡』や『小説神髓』を感嘆する幼稚さを呆れると同時に、文学上の野心が俄にムズムズして来た。尤も進んで春廼舎と競争しようというほど燃上ったのではなかったが、左に右く春廼舎の技巧や思想の齒癢さに堪えられなくなった結果が『小説神髓』の疑問の箇処々々に不審紙を貼ったのを携えて突然春廼舎の門を叩いた。語学校を罷めてから間もなくであった。

二葉亭が春廼舎を訪問したのは、昔の武者修行が道場破りをするツモリで他流試合を申込むと多少似通った意気込がないではなかった。が、二葉亭は極めて狷介な負け嫌いであると同時にまた

極めて謙遜けんそんであつて、如何いかなる人に対しても必ず先ず謙虚して教おしえを待つおろその礼を疎かにしなかつた。春廼舎あきたを慊あきたらなく思つていたには違ちがひないが、訪問したのは先輩を折しやくぶく伏ふくして快を取るよりは疑問を晴らして益を享うくるツモリであつたのだ。が、ビエリンスキーに傾倒しゴンチャロフ、ツルゲーネフ、ドストエフスキー等に飽満した二葉亭が『書生氣質』の著者たる当時の春廼舎に教えられる事が余り多くなかつたのは明あきらかに想像し得られる。

が、それ以後しばしば往来して文学上の思想を交換すると共に文壇の野心を鼓インスパ吹イヤされた事は決して尋ひとと常おりでなかつた。矢崎や鎮四郎ざきしんしろうを春廼舎に紹介したのもやはり二葉亭であつた。矢崎は明治十九年の十月には処女作『守銭奴しゆせんどの肚はら』を公けにし、続

いて同じ年の暮れに『ひとよぎり』を出版し、二葉亭に先んじて逸いちはや早く嵯峨さがの屋やお室むろの文名を成した。

二葉亭の初めての試みはゴーゴリの翻訳であつた。が、世間には発表しなかつた。その発表しなかつた理由は不明であるが、多分性来の自重心が軽々しく公けにするを欲しなかつたのであろう。その時分またビエリンスキーの美論の一部を翻訳した事があつた。尤もこの翻訳は春廼舎を初めビエリンスキーを知らない友人に示すためであつて、公けにするツモリはなかつたのであるが、その中の一部分が翻訳後暫しばらく経たつてから冷々亭主人の名で前記した早稲田わせだの機関誌の『中央學術雑誌』に掲載された。が、ビエリンスキーの美論は当時の読書界には少し高尚過ぎたから、誰にも碌ろ

くろく
 々 読まれず、殆んど注意されずに終つたが、今から三十年前に
 こういふ深^{しんすい}邃な美学論が翻譯されたというは恐らく今の若い人
 たちの思掛けない事であろう。その時分二葉亭は冷々亭^{きょうこう}杏雨、
 率性堂、または翁々亭^{きゆうきゆうてい}と称していた。

その頃二葉亭は学校を罷めてしまつて、これから先きどうでも
 一本立ちにならねばならない場合であつた。親代々家禄で衣食し
 た士族^で出の官吏の家では官吏を最上の階級とし、官吏と名が付け
 ば腰^{こしべん}弁^{いづかど}でも一廉の身分があるように思つていたから、両親初
 め周囲のものは皆二葉亭の仕官を希望していた。が、二葉亭は決
 然袂を揮つて退学した余勇がなお勃々としていた処へ、春廼舎か
 らは盛んに文学を煽^{あお}り立てられ、弟^{おととぶん}分に等しい矢崎ですらが

忽ち文名を揚あぐるを見ては食指動くの感に堪えないで、周囲の仕官の希望を無視して、砂を嚙かんでも文学をやると意気込んでいた。その時分の文学的霸心はしんは殆んど天ちゆうに冲うする勢いであつた。

三 『浮雲』及びその時代の生活

『浮雲』の第一編が発行されたは明治二十年七月であつた。この第一編は今も昔も変らぬ書肆しよしの商略から表紙タイトルページにも扉にも春廼舎隴著と署して二葉亭の名は序文に見えるだけだから、世間は春廼舎をのみ嘖さくさく々として二葉亭の存在を少しも認めなかつた。二葉亭の名が一般読書人に知られて来たは公然その名を署した第二編の発

行以後である。が、それすら世間は春廼舎の別号あるいは傀儡かいらいである如く信じて二葉亭の存在を認めるものは殆んど稀まれであつた。

尤も第一編は春廼舎の加筆がかなり多かつたから多分の春廼舎臭味があつた。世間が二葉亭を無視して春廼舎の影法師と早吞はやのみ込こみしたのも万更まんざら無理ではなかつた。が、誰でも処女作を発

表する時は臆病で、著作の経験上一日の長ある先輩の教えを聞くは珍らしくない。ましてや謙遜な二葉亭は文章の造詣ぞうけいでは遙おのにむなしゆ春廼舎に及ばないのを認めていたから、己おのれを空うして春廼舎の加筆を仰いだ。春廼舎臭くなつたのも止むを得なかつた。が、一端発表して後は自信を強くし、第二編には思う存分に大胆な言文

一致を試みて自個の天地を開き、具眼の読書子をして初めて春廼舎以外に二葉亭あるを承認せしめた。

言文一致の創始者としては山田美妙が多年名誉を独占し、今では美妙と言文一致とは離るべからざるものの如く思われておる。が、美妙の『夏木立』は明治二十一年八月の出版で、『浮雲』第一編よりは一年遅れてる。尤も『夏木立』中の「武蔵野」は初め『読売新聞』に載つたのであるが、やはり『浮雲』の方が先じていた。あるいは『浮雲』第一編は厳密な意味の言文一致でないという人があるかも知れぬが、「武蔵野」もまた頗る雅文臭すこぶいもので、時代の先後をいったら二葉亭の方が当然その試みに率先した名誉を荷になうべきはずである。不思議な事には美妙と二葉亭とは

親たちが同じ役所の同僚であつて、児供こどもの時からこどもの朋友であつた。尤も竹馬の友というだけで、中ごろは交際が絶え、相談したのでも申合まごわしたのでもなかつたが、相期せずして幼友おさなとも達同士のこの二人が言文一致体を創はじめたというは頗る不思議な因縁であつた。尤もこれより以前、漢字廃止を高調した仮名の会の創立当時から言文一致は識者の間に主張され、極めて簡単な記事文や論説を言文一致で試みた者もあつた。同時にこれより三、四年前に発明された速記術がその頃漸ようやく実際に応用されて若林珮蔵かんぞうの速記した円朝えんちようの『牡丹燈籠』が出版されて活いきた口話の実例を示したのが俄に言文一致の機運を早めたのは争えない。美妙も二葉亭もこの円朝の口話の速記に負う処が多かつたのは想像するに

余りがある。明治の文章史を作る者は円朝の『牡丹燈籠』と速記者若林珣蔵の功勞とを無視する事は出来ない。

かつまた美妙と二葉亭との文体は等しく言文一致であつても著るしい語系の差異がある。美妙は本もとが韻文家であつて韻語に長じ、兼ねて戯文の才があつたから、それだけ従來の国文型が抜け切れない処があつた。二葉亭も院いんぼん本や小説に沈潜して好んで馬ば琴きんや近松ちかまつの真似をしたが、根が漢学育ちで国文よりはむしろ漢文を喜び、かつ深く露西亞文ししたしに親んでいたから、容易に国文の因襲を脱して思切つて大胆なる言文一致を試みる事が出来た。春廼舎の加筆した『浮雲』第一編は別として、第二編となると全然従來の文章型を無視した全く新らしい文体を創はじめた。二葉亭の直話

に由ると、いよいよ行詰ゆきづまって筆が動かなくなると露文で書いてから翻譯したそうだ。二葉亭の露文は学生時代からグレエ教師が感嘆したという位で、後にダンチエンコが来朝して能見物うぢに案内した時、ダン君に示すための当日の能の筋書を前夜の中に露識したというほどの腕達者だから、露文で書いて邦識したというのも強あながち英雄人を欺くできそこの放言だとは思われない。ゴンチャロフの真似をして出来損できそこなつたとは二葉亭が能よく人に話した謙遜のような自得のような追懐であつた。『浮雲』の文章に往々多少の露ろしゆう臭があるのはこれがためであろうが、そこが在来の文章型を破つた独創の貴とさである。美妙のは花やかにコツテリして故わざとらしい厭味いやみのある欧文の模倣みに充ちていた。丁度油をコテコテ塗なすつて鬢かつら

のように美しく結上げた束髪そくはつが如何にも日本臭いと同様の臭味があつた。二葉亭のは根本から欧文に醇化じゅんかされ、極めて楽に日常用語を消化して全く文章離れがしていたが、美妙のはマダ在来の文章型を脱し切れぬ未成品であつた。美妙の功勞を十分認めるとしても、また創始者たる名譽は二人の中のドツチとも定められないとしても、今日の言文一致の宗とするは美妙よりはむしろ二葉亭である。

さてこの『浮雲』の構案であるが、一体この構案を何処どこから得て来たかは不明である。二葉亭は自分の性格の一部を極端に誇張したもの（即ち文三）を中心として両親や周囲の人物の性格を同じく極端に延長したものを配して新旧思想の衝突を描いたのであ

ると、極めて漠然ばくぜんたる話をした事があつた。大雑駁おおざつぱにいえばツルゲーネフ等に倣ならつて時代の葛藤かつとうを描こうとしたのは争われないが、多少なりともこれに類した事実が作者の視聴内にあつたか乎否乎は二葉亭はかつて明言しなかつた。ただその頃の作家は自分の体験をありのままに書き周囲の人物をモデルとするような事は余り倣しなかつたから、『浮雲』のモデルや事実は先ずなかつたろうと信ずる。

二葉亭から直接聞いた咄はなしに、二葉亭の家の直ぐ近所にA・Nというその頃若い書生間に評判な新らしい女が住んでいたが、強しいていえばこの女が『浮雲』のお勢のモデルであつたそうだ。女学生ではあるが学校へは行かないで弟と二人で世帯を持って、国から

送る学費で氣随氣儘きままに暮ちつしていた。少とばかり洋書が読めて多少
 の新らしい趣味を解し、時とき偶たまは洋服を着る当時の新らしい女で、
 男とばかり交際していた。その頃は今より一層はなは甚だしい欧化熱の
 頂上に登り詰めた時代であつて、青年男女の交際が盛んに鼓舞さ
 れ、本郷ほんごう神田辺の学生間に□□会、△△俱樂部クラブなどと称する男
 女交際を唯一の目的とする、今なら不良扱いされる青年の団体が
 イクツもあつた。Nはこういう団体の何処へでも顔を出して跳はねま
 廻わっていたから、御面相は頗る振ななかつたが若い男の中には
 顔が売れていた。当時のチャキチャキの新らしい男たる硯友社けんゆうしゃ
 の中にもこの女と親しいものがあつたはずである。その上にこの
 女は弟と二人ぎりの氣随氣儘の暮しをしていて、遠慮きがね氣兼かねをする

者が一人もいなかったから、若い男は好い遊び場にして間断しつかりなしに出入でいりして、毎晩十二時一時ごろまでもキャツキャツと騒いでいた。小説家となるツモリになつていても志士氣質の失せうない二葉亭は、女と交際するような事は決してなかつたが、ツイ眼と鼻の間だから近所の評判となつてこの女の噂うわさを聞いていたので、いよいよ小説を立案するに方あたつて偶然憶おも付いたのがこの女であつた。そこでこの女をモデルとして当時の新らしい女を描こうとし、この目的のためにしばしばこの女の住居すまいの近所を徘徊はいかいして容子ようすを瞥見べっけんし、或る晩は軒下のきしたに忍んで障子に映る姿を見たり、戸外いに洩れる声こゑを窃聴ぬすきいたりして、この女の態度から起居振たちいふるま舞い、口吻こうふんまでをソックリそのままに写したのがお勢であるそ

うだ。無論外形の一部分をモデルとしたので、全体を描いたのではなかった。第一、この女は随分マズイ御面相で、お勢のような美人でなかった。かつお勢よりもお転婆てんばであり引摺ひきずりであった。その上に御面相の振わないのを自覚していた為せいであろうが、男と交際していてもお勢のような coquettish な容子は少しもなかった。仮にこの女と本田と取組ましたなら、お勢のように本田のなぶりも 翫なぶり 弄のにならないでかえって本田を翫弄なぶりにしたかも知れない。恐らくこの女は当時の世評嘖々たる『浮雲』を読んだに違いないが、自分がお勢のモデルであるとは気が附かなかつたであろう。お政にも昇のぼるにもモデルがあるといつて、誰それであろうと揣摩しまする人もあるが、作者自身の口からは絶えてソナナ咄を聞かなかつた。

勿論、文三が作者自身の性格の一部を極端に誇張して作為したのが争われないと同様に、作者に近接する人物の性格の一部をモデルとしたに違いなからうが、二葉亭はお政や昇については何にも咄さなかつた。

全体として評すれば『浮雲』の文章及び構作は共に未成品たるを免かれない。が、『浮雲』を評するものは今より殆んど四十年前の作、二十四歳の青年の作である事を記憶せねばならない。これより以後多くの文人が続出して、代る代るに文壇を開拓して仏露の自然主義まで漕こぎ付けるにおよそ二十年を費やしている。少くも『浮雲』の作者は二十年、時代に先んじた先せん駆者くしやであるといわねばなるまい。単に文章の一事だけでも、今日行われてる小説

文体の基礎を築いた功勞者であるといわねばなるまい。どの道、春廼舎の『書生氣質』や硯友社連の諸作と比べて『浮雲』が一頭地うちぬぎを挺ぬきんずる新興文芸の第一の曙光しよこうであるは争う事は出来ない。中には文学史上の著名の傑作が時代という考を去るとしおしは価値が乏しくなる幾多の例から推して、『浮雲』をもまた時代の産物以上の価値がないもののように軽視するものがあるが、外国の名著と比べたらあるいは余り多くを価値する事が出来ないかも知れないが、日本のとなら同時代のもはさて置き、今日噴々される諸作と比べても決して軒輕けんちする処がない。但し『浮雲』は二葉亭の思想動搖の過程に跨またがつて作られてるから、第一編と第二編と第三編と、各々箇立またして一貫する脈絡を欠いている。

が、各々独立した箇々の作として見ても現代屈指の名作たるを少しも妨げない。強^{しい}て評価すれば、第一編はマダ未熟であり、第三編は脂^{あぶら}が抜けて少しくタルミがあるが、第二編に到つては全部が緊張していて、一語々々が活き活きと生動しておる。未成品であつても明治の文学史に燦^{さんらん}爛たる頁を作るエポック・メイキングの名著である。

四 『あいびき』 及び 『めぐりあい』

丁度同時代であつた。徳富蘇峰^{とくとみそほう}は『将来之日本』^{ひつさ}を拏^ひげて故山から上つて帝都の論壇に突入し、続いて『国民之友』を創刊し

て文名隆々天下を圧する勢いがあった。当時の青年は皆その風を望んで蘇峰に傾倒し、『国民之友』は殆んど天下の思想界に号令する觀があつた。二葉亭もまた蘇峰が高調した平民主義に共鳴し、臂を把つて共に語る友と思込んで、辞を低うし礼を尽して蘇峰を往訪した。が、熱烈なる天才肌の二葉亭と冷静なる政治家氣質の蘇峰と相契合するには余りに距離があり過ぎたから、応酬接見數回を重ねた後はイツとなく疎遠となつてしまつた。が、天下の英才を集めて『国民之友』を賑わすのを片時も怠らなかつた蘇峰はこの間に二葉亭のツルゲーネフの翻譯を紙面に紹介して読書界の耳目を聳動した。『浮雲』は初め春廼舎の作として迎えられ、二葉亭の名が漸く知られて来てからもやはり春廼舎の影武者であ

るかのように思われていた。二葉亭の存在が初めて確実に世間に認められたのは『浮雲』よりはむしろ『国民之友』で紹介された翻訳の『あいびき』であった。

その頃の翻訳は皆筋書であった。大体の筋さえ通れば勝手に省略したり^{さんじゆん}刪潤したり、甚だしきは全く原文を離れて梗概^{こうがい}を祖述したものであった。かつ翻訳家の多くは邦文の造詣に貧しいただの語学者であつたから、翻訳文なるものは大抵ゴツゴツした漢文崩し^{くず}やあるいは舌足らずの直訳やあるいは半熟の馬琴調であつて、西文の面影を^{しゆ}偲ぶに足らないは魯^{おろ}か邦文としてもまた読むに堪えないものばかりだった。この非芸術的濫訳横行の中にあつて、二葉亭の『あいびき』は殆んど原作の一字一句をも^{なおよ}等閑^{ざり}に

しない翻譯文の新らしい模範を与えた。後年盛んに翻譯し出した頃二葉亭は『あいびき』時代を追懐して、「あの時分はツルゲ―ネフを崇拜して句々皆神聖視していたから一字一句どころか言語の排列までも原文に違たがえまいと一語三礼の苦辛くしんをした、あんな馬鹿骨折ほねおりは最もう出来ない、今ならドシドシ直してやる、」と笑つた事があつた。『あいびき』の訳文の価値は人に由よつて区々の議論があろうが、苦辛慘澹さんたんは実に尋常一様でなかつた。

が、余り原文に忠実であり過ぎたため、外国文章の句法辞法に熟する人でなくてはとても理解されない難かしいものとなつた。尤もつとも当時のタワイない低級小説ばかり読んでる読者に対して一足飛びにツルゲ―ネフの鑑賞を要求するは豚に真珠を投げるに等し

い無謀であつて、大抵な読者は最初の五、六行から消化し切れな
 いで降参してしまつた。この難解の訳文を平易に評釈して世間に
 示し、口を極めて原作と訳文との妙味を嘖々さくさく激称したは石橋いしばし
 忍月にんげつであつた。当時の一般読者が『あいびき』の価値をほぼ了
 解してツルゲーネフを知り、かつ二葉亭の訳文の妙を確認したは
 忍月居士こじの批評が与あずかつて大おおに力があつた。

続いて『都之花』の発刊と共に『めぐりあい』が五号に涉つて
 連載された。『あいびき』に由てツルゲーネフの偉大と二葉亭の
 訳筆の価値とを確認した読者は崑山こんざんの明珠を迎うる如くに珍重
 愛惜し、細つさに一字一句を翫味研究して盛んに嘖々した。が、普
 通読者間にはやはり豚に真珠であつて、当時にあつてこの二篇の

価値を承認したものは真に寥々りようりようしんせい晨星であつた。が、同時にこの二篇に由て初めて崇高なる文学の意義を了解し、堅実なる新らしい文学の基礎を固め、もしくは感激して新文芸の開拓を志すに至つたものは決して少くなかつた。国木田独歩くにきだどつぽの如きは実にその一人であつて、独歩一派の自然主義運動は実にこの『あいびき』と『めぐりあい』とに発途しておる。短かい翻譯であるが啻ただ翻譯界の新生面を開いたばかりでなくて、新しい文芸の路を照すの光輝ともなつた。その文壇に与えた効果は『浮雲』よりもかえつて偉大であつたかも知れない。時代の先駆者としての二葉亭の名誉は今から三十余年前にツルゲーネフを翻譯した功績だけでも十分承認しなければなるまい。

五 『浮雲』時代の失意煩悶

『浮雲』著作当時の二葉亭は覇氣鬱勃はきうつぽつとして、僅わずかに春廼舎を友とする外は眼中人なく、文学を以てしては殆んど天下無敵の概があつた。が、一面から見れば得意時代であつたが、その得意といふは周囲及び社会を白眼傲睨ごうげいする意気であつて、境遇上の満足でもまた精神上の安心でもまた思想上の矜持きやうぢでもなかつた。

その頃の二葉亭は生活上の必要と文芸的興味の旺盛おうせいと周囲の圧迫に対する反抗とからして文学を一生の生命とする熱火の如き意気込があつた。が、二葉亭の文学というは人生に基礎を置く文

学であつて、単なる芸術一天張の享樂主義や遊蕩ゆうとうざんまい三昧や人情趣味の文学ではなかつた。即ちビエリンスキーの文学、ゴンチャローフの文学、ドストエフスキーの文学、ツルゲーネフの文学であつて、京きやう伝でんの文学、春しゆん水すいの文学、三馬さんばの文学ではなかつた。

然るに当時の文壇は文芸革命家をもて他ひとも許し自らも任ずる春廼舎主人の所説ですらが根本の問題に少しも触れていない修辭論であつて、人生問題の如きは全く文学と交渉しないものと思われていた。例えば『浮雲』に対する世評の如き、口くちを揃そろえて嘖ざんざん々々称讚したが、渠かれらの称讚は皆見当違いあるいは枝葉末まつしやう梢しょうであつて、凡近卑小の材とらを捉とらえて人生の機微を描こうとした作者の觀

照的態度に對して批判を加えた者は殆んど一人もなかつた。尤もこの二葉亭の目的は失敗してしたが、その失敗を認めて考察の足りないのを痛切に感じたのは作者自身であつて、世間一般の読者は（文壇の審判官たる批評家でさえも）作者が油汗を流した人生の觀照には全く無関心没交渉であつた。如何に感嘆されても稱讚されても藪やぶ睨にらみの感嘆や色盲的の稱讚では甘受する事が出来な
いで、先ず出発の門出かどでからして不満足を感じざるを得なかつた。
加しかの之みならず、初めは霸心鬱勃として直ちに西歐大家の墨を衝つ
こうとする意気込であつたが、いよいよ着手するとなると第一に
遭逢したのは文章上の困難であつた。如何に因襲の旧型を根本的
に破壊するツモリであつても、日本文で書く以上は日本の在來の

文章語や俗談口語の一と通りを究めねばならなかつた。二葉亭は漢学仕込で魏ぎしゆくし叔子や壮悔堂を愛読し、国文俗文の一と通りにも通じていたが、いよいよ文学を生命とするとなると、それまでは閑余の漫読に過ぎなかつた群書の涉獵にヨリ一層進んで深く造詣しなければならぬから骨が折れた。然るに二葉亭の志ざす文学は道楽気分の遊戯でなくして真劍命掛けであつたから、如何に文章を研究するためでも、日本の在来の遊戯文章を真面目まじめになつて研究する馬鹿々々しさに堪えられなかつた。二葉亭の当時の日記に、「我れ今まで藥やくたい袋もなき小説を油汗にひたりて書き来りしが、これよりは將はた如何にすべき、我が筆は誠に稚おさなし、もしこれよりも小説を書きて世を渡らんとせば先づ文を属する事を習はざる

べからず、迷惑がらるるを目をねぶつてこらへ、人の蔵書を借りて読まざるべからず、その書は如何なる類たぐひかといへば、粹とか通とかいひてこの世を遊び暮せし人々の食はうがため呼吸をしやうがために書散らしたるありても益なくなるとも不自由にもなきつまらぬ書物のみなり、かかる書類に眼を勞つからせ肩をはらし命を撈むしり取られて一世を送るも豈あに心外ならずや」云々とあるは当時の心事を洩もらした述懐であつて、二葉亭はこの文章上の困難に一通りならない苦辛をみた。とりわけ自己を批判するに極めて苛酷かこくな人の癖として十目の見る処『浮雲』が文章としてもまた当時の諸作に一頭地いっとうちを挺ぬきんずるにもかかわらず、深く自ら恥じかつ懼おそれて「自分には小説は書けない、自分は文人たる資格がない」と

まで気を腐らせてしまった。

かつまた二葉亭のためには文学それ自身よりは根本の人生問題の方が重大であった。ツマリ人生のための文学というが、そもそも人生をどうしようというの乎^か。人生の帰趣とか目的とかいうものが果してあるのдарう乎。安心とか信仰とかいうものが果して得られるのдарう乎。知識で究めるのは果し^{はて}が着かないというなら、科学や哲学に何の権威がある乎。科学や哲学で究めても解らないものなら文学や宗教でどうして満足出来る乎。そんな疑問が推究すれば推究するほど後^{あと}から後から後からと生じて終^{つい}には文学その物の価値までが危^{あぶ}なつかしくなり、ツルゲーネフやドストエフスキーの後光が段々薄くなり出すと、これらの文豪に比べて遥

に天分薄い日本の文人亜流——自分もその一人として——の文学
 三味は小児の飯ままじごと事同様の遊戯であつて、人生のための文学など
 とは片腹痛い心地がして堪えられなかつた。

然るにまた一方には物質上の逼ひつぱく迫がヒシヒシと日に益々加わ
 つて来た。尤もその頃二葉亭はマダ部屋住へやずみであつて、一家の事情
 は二葉亭の自活または扶養を要求するほど切迫しているとは岡目
 には見えなかつた。左とに右かく土蔵附きの持家もちいえに住すまつていた。シ
 カモ余り広くはなかつたが、木口きぐちを選んだシツカリした普請で、
 家財道具も小奇麗きちんに整然と行届きちんいていた。親子三人ぎりの家族で、
 誰が目にも窮きゆうしているどころか、むしろ気楽そうに見えていた。
 が、その頃の——恐らくは今でも——惣すべての人の親は、家に資産

があるかと否とを問わず一家の運命希望を我が子の立身出世に繋い
 づるから、滞りなく無事に学校を卒業してドコへか就職してくれ
 なければ安心もし満足もしなかつた。折角卒業の間際まで漕付け
 ながら袴はかまを脱ぐ如く暢気のんきに学校を罷やめてしまい、シカモ罷まぎわめてし
 まつて後に何をする見当もなく、何にもしないで懐ふところ手あきたをして
 ブラブラ遊んでいと外ほか思われぬ二葉亭の態度や心持を慊あきたらな
 く思うは普通の人の親としての当然の人情であつた。昔の士族気
 質から唯一の登龍門と信ずる官吏となるのを嫌つて、碌ろくでもない
 小説三昧ふけに耽ひるは昔むかし者ものの両親の目から見れば苦にが々にがしくて黙
 つていられなかつた。

尤も『浮雲』に由て一躍たいかすう大家数に入つた二葉亭の成功につい

ては老親初め周囲のものは皆驚嘆もし満足もした。丁度ドストエフスキーの『しいた虐げられた人々』中のイユメニエフという老人が青年作家たる若い甥おいの評判高い処女作を読んで意外な作才に驚くと同一の趣きがあつた。が、文名の齎もたらし来る収入はとうとうといくばくもなかつたので、感嘆も満足もただのいつとき一時であつた。加のみ之ならず、二葉亭は一足飛びに大家班に入つたにかかわらず、文学を職業とする気があるかないか解らぬくらいノンキであつて、文名の籍せきじん甚おとに乗じて文壇に躍り出すでもなく、そうかといつて他に相当な生活の道を求める手段を講ずる気振けぶりもなかつたから、一い図ちずに我が子の出世に希望を繋ぐ親おやごころ心からは齒痒はがゆくも思い呆あきれもして不満たらざるを得なかつた。

搗かてて加えて一家の實際の事情は岡目で見ると決して氣樂でなかつた。氣樂どころかむしろ逼迫いさしていた。これより二、三年前、二葉亭の先人は官を罷めて聊いさかの恩給に衣食し、二葉亭の毎月の學費も最後の一、二年は蓄財を割さいて支弁しつつ万事の希望を二葉亭の卒業後の榮達に期していたのである。であるから二葉亭は卒業するとしないとに論なく、學校を罷めたその日から直ぐ一家を背負つて立たねばならない實際上の責任があつた。二葉亭の日記に由ると、父の恩給高は十一円であつたそうだ。如何に物価の安い四十年前でもまた如何に小人数こにんずでも十一円で一家を維持するといふは容易でなかつたから、岡目から見ると如何に氣樂でなかつたのは想像されるので、この窮状を子として拱手こうしゆして知ら

ぬふりする事は出来なかつた。尤も公債もあり蓄財もあり、家屋も自分の所有であつて、正味十一円こっきりの身代ではなかつたが、割合に気楽な官吏の生活を送つたものが多年儉約して剩あました蓄財を日に日に減らして行くは、骨を削り肉を刻むに等しい堪えがたい苦痛であるのが当然で、何かにつけて愚痴の出るのも無理ではなかつた。かつあたかも少年時代から友達同士の山田美妙が同じ文壇に立つて名声籍甚し、『以いらつめ良都女』や『都之花』の主筆として収入もまた豊かであるのを見ては、二葉亭の生活上の煮え切らない態度が戻もとかしくなつて、何かにつけては「山田の武さんを御覽」と云い云いした。

二葉亭がもし「山田の武さん」の真似をするツモリなら、生活

問題の如きは造作もなく解決されたのである。が、二葉亭の文学というは満身にちからこぶ力瘤ちからこぶを入れて大上段おおじようだんに振りかぶる真劍勝負であつて、矢声やこえばかりをさか壯んにする小手先こてさき劍術の見せ物試合でなかつたから、美妙や紅葉と共にくつわなら轡を駢べて小手先きの芸頭を競争するような真似は二葉亭には出来なかつた。文学の立場は各々めいめ違つてるから、一概に美妙や紅葉の取つた道を間違つてると輕断するではないが、二葉亭にいわしむれば生活の血の滲にじまない製作は文学を冒瀆ぼうとくする罪悪であつたのだ。「あんな器用な真似は出来ない、自分には才がない」と二葉亭は謙遜していたが、出来る出来ない、才のあるなしよりは自分の信奉するツルゲーネフやドストエフスキーやゴンチャロフの態度と違つた行き方をし

て生活の方便とするを内心窃ひそかに爪弾つまはじきしていた。その頃、二葉亭の交際した或る文人が或る雑誌に頼まれて寄稿した小説が頗すこぶる意に満たないツマラヌ作であるを頻しきりに慚愧ざんきしながらも、原稿料を請取ると大いに満足して直ぐ何処どこへか旅行しようと得意になる心のさもしさを賤かろんじて日記に罵ののっている。自信のない作を与えて報酬を請取るを罪惡の一つとしていた二葉亭は、これではとても文学でパンを得る事は覚おぼ束つかないと将ゆく来すえを掛念けねんしたばかりでなく、実は『浮雲』で多少の収入を得たをさえ恥じていた。文壇的野心の鬱勃うよくとしていた当初は左も右かく、自分の文学的才能を危ぶみ出してからは唯一の生活手段とするつもりもりのの文学に全く絶望して、父の没面、母の愚痴、人生問題の紛糾疑惑、心の隅すみの何処どこ

かに尚まだ残つてる政治的野心の余燼よじん等の不平やら未練やら慚愧そんまいやら悔恨くわいこんやら疑惑ぎふくやらが三方四方から押寄せて来て、あたかも稻麻とうま竹葦ちくいと包圍ちくいされた中に籠ろうじよう城じようする如ごとくに拔ぬき差さならない煩悶はんもん苦吟さいなに苛さいなまれていた。

二葉亭の日記の数節を引いて、その当時の煩悶焦慮を二葉亭自身をして語らしめよう。

「白はく石せき先生の『折おり焚たくし柴しばの記き』を讀よみて坐そろに感あずる所あり、先生が若かりし日、人のさかしらに仕を罷めて浪人の身となりさがりたる時、老いたる父母を養ひかねて心苦しく思ふを人も哀れと見て、あるいは富家の女婿になれと勧められ、あるいは医を学びて生業を求めよといさめらる、並々の人な

らましかば、老いたる父母の貧しうくらすを看過みすごしがたしとて志も挫くじけ気の衰ふるにつけ、我に便べんよき説をも案じ出して、かかる折なほ独善の道を守らば弥々いよいよ道に背そむかななど自らも思ひ人にもいひて節を折るべきに、さはなくてあくまでも道を守りてその節を渝かへず、父なる人も並々の武士にはあらで却かえりてこれを嬉うれしと思ひたり、アアこの父にしてこの子あり、新井父子あらうの如きは今の世には得がたし、われ顧みてうら恥かしく思ふ。」

「ああ我が氣力は衰へたる哉かな、学校を出いでしより以来一日として心の霽はるる事なければ楽しとおもひたることもなし、今の我が身の上をひしひしと思ひつむる時、生きてかかる憂うきめ目

見んより死してこの苦を免かるる方はるかに勝るべしなど思ひたるは幾度もありたれど、その頃はまだ氣力衰へたれど滅めつするには到らざりしをもて、筆を執りて文を草することも出来しなり、されどこのごろは筆を執るも慵ものうくてただおもひくづをれてのみくらす、誠にはかなきことにこそあれ。」

「反ほんやく訳そうしよ叢書は本月うちに発はつだ兌だせんといひしを如何にせしやらん、今においてその事なし、この雑誌には余も頼まれて露文を反訳せしにより、その翻譯料をもて本月の費用にあてんと思ひをりしに今は空だのめとなりしか、人事齟齬そご多し、覚えず一歎を発す。」

「この頃は新聞紙を読み、何某は剛毅ごうきなり薄志弱行の徒は

慚死すべしなどいふ所に到れば何となく我を誹りたるやうに
 おもはれて、さまざまに言い訳わけめきたる事を思ふなり、かく
 までに零落したる乎。」

当時の二葉亭の煩悶はこの数節に由るも明あきらかであろう。進んで
 小説家たる覚悟も勇氣もなく、さればとて退いて欲するままに静
 かに読書研究するをも許されない境涯であつた。二葉亭の日記に、
 「公債を買ひたい買ひたいといふゆゑ周旋していよいよよとなる
 いやになり、借家を買ひたい買ひたいといふゆゑ周旋していよ
 よよとなるとこれもまた二の足を踏む人は周旋人が迷惑すとかやい
 ひたり、旨うまき事をいひたるものなり、」とあるは当時の二葉亭が
 右すべきや左すべきやと迷つた心状を自ら罵つた冷れい嘲ちやうである

う。二葉亭は人のする事が何でも面白くなつて常に気が変わるを到底事を成すに堪えざる性格として同じ日記中に自ら嘆息しているが、こういう性格も多少は手伝つたのであろうが、当時の境遇上処世の方向に迷つたのは無理もなかつた。

その間に試みたのがツルゲーネフの『あいびき』の翻訳であつた。が、この翻訳は前にビエリンスキーを翻訳したと同じく、自ら傾倒するツルゲーネフを紹介して公衆に興味を^{わか}頷とうとしたので、原稿料を取るためではなかつた。勿論、民友社は報酬を支払つたが、その報酬は何ほどのものでもないから生活を補う資にはならなかつた。

今の女子学院の前身の桜井女学校に^{へい}聘されて文学を講述したの

もこの時代であつた。ツイ先頃ヨーロッパ欧羅巴から帰朝する早々のうせん脳栓そく塞で急死した著名の英語学者長谷川喜多子女史や女子学院の学みたにたみこ監三谷民子女史はタシカ当時の聴講生であつたと思う。が、ビエリンスキーやドブローリユーボフを祖述する二葉亭の文学論は当時の女学生の耳には（恐らくは今の女学生にも）余りに高遠深邃しんすいであつて、満堂殆んど耳を傾くるものが一人もないのに失望していくばくもなく罷やめた。が、これもまた生活のためではなかつたので、自分の信奉する説を一人にだも多く——うら若い婦人に対してすらも——講演して新らしい思想を鼓吹する機会を得たのを喜んで応じたのであるから、この窮乏の間に処おりながら初めから報酬を辞して受けなかつた。

六 『浮雲』第三篇及び官報局出仕

『浮雲』第三篇の発表されたのはこれより少し後であった。この三篇を書いていた時はあたかも胸中の悶々に堪えなくて努力も功名も消えてしまった真最中まつさいちちゆうであった。日記に、「余は今日に到るまで小説家にて世を送る望みなしといひつつもなほ小説家とならんことをのみつとめり、他より見ればをかしく見ゆべし」とあるは毎月書肆しよしから若干ずつ資給しよじされていた義理合上余儀なくされて洩りがちな筆を呵かしつつよんどこつ拋なるなしに机に向つていた消息を洩らしたのであらう。

二葉亭は何をするにも真劍勝負であつた。襷たすき鉢はちまき巻ももだちに股もも立取たちあがつて、満身に力ちからこぶ瘤こぶを入れつつ起たちあが上あがつて、右からも左からも打込すきむ隙すきがない身構えをしてから、曳えいやツと気合きあいを掛けて打込すきむ命掛いのかけの勝負であつた。追取おつとり刀がたなでオイ来たおつとりがたなと起上おつとりがたなる小器用な才さいに乏すくなくしかつた。「間に合わせ」とか「好い加減」とかいう事が嫌いであつたし、また出来ない人であつた。談話するにさえ一言一句を考え考え腹の底から搾しぼりだ出し、口先きでお上じようず手てや胡麻化ごまかしをいう事が決して出来なかつた。それ故、文芸上の興味が冷め、生活上の苦勞さいなに苛さいなまれていても一夜漬いちやづけの書かきな流ながしで好い加減かきながに覺けりをつけて肩を抜いてしまふという事は出来ないで、イヤイヤながらくしんもやはり同じ苦辛くしんを重ねていた。が、実は最もう小説どころで

なかつた。根本の人生の大問題が頭の中で渦うずを巻いていた。身に迫る生活上の苦勞がヒシヒシと押寄せて来た。惰力で筆を執つていてもイツマデた経つても油が乗つて来なかつた。イクラ悶もだいても焦あせつても少しも緊張して来なかつた。真劍勝負でなければ何にも出来ない人がどうしても真劍勝負の意気込になれなかつた。

『浮雲』第三篇は作者の日記の端に書留めた腹案に由ると、お勢の墮落と文三の絶望とに終るのだが、発表されたものを見ると、腹案の半ばにも達しないで中途から尻しりきり切とんぼに打切られておる。恐らくはマダ発表するを欲しない未定稿であつたろうと思う。尤もこの悶々の場合にこれより以上に玉ぎよくせい成する事はとても出来なかつたろう。かつ、二葉亭の性質として決して好い加減に書か

擲きなぐつたものではないだろうが、三方四方の不平不満が一時に殺
 到する心的葛藤に忙殺されては、虚心坦たんかい懷おちつに沈着すいこいて推
 敲うたんれん鍛練していられないのが当然であつた。恐らく書肆に対す
 る義理合上扱ろなしに自分でも満足しない未成の原稿をイヤイヤ
 ながら引渡したに違ひないのは前後の事情から明瞭に推断される。
 二葉亭の日記に由ると、第三篇の発表された『都之花』を請取
 った時は手がブルブル慄ふるえて、歩きながら読んで行く中に忽ち顔
 色が変わつて、「これほど拙つたないとは思わなかつた、印刷して見る
 と我ながら拙なくて読むに堪えない」と、読終つた時は心が早はや
 鐘ねを突く如くワクワクして容易に沈着すいこいていられなかつたとあ
 る。

なるほど、前にもいった通り、第三篇は油の十分乗った第二篇に比べると全部に弛たるみがあつて気が抜けておる。が、同じ時代の他の作家の作と比べて決して見劣りしなかつたが、己れの疵し瑕かを感ずるに余りに鋭敏な作者は、丁度神経過敏家が卵うの毛で突いたほどの負傷でも血を見ると直ぐ氣絶するようになり、自分の作が意に満たないと坐いても起たつてもいられなかつたらしい。聡そう明めいに過ぐるものは自信を欠くと昔からいうが、二葉亭の如きはその適切なる一例であつた。自分を局外に置いて見る時は群小作家皆豆粒よりも小さかつたが、自分をその中の一人として比較する時は豆粒よりも小さく思う人よりも更に一層自分が小さく思われて堪えられなかつたようだ。その時の日記にも「今までは某々らの作る小説

は拙なくして読むにたへずと思ひつるが、余の作に比ぶれば彼らの作は遙に勝れり、余は元来小説家にも非^{あら}ず、また小説家とならんとも思はず、「云々とあるように、これより以前から文学に絶望して衣食の道を他に求めるべく考えていたのがこの不快な絶望にいいよいよ益々^{そそ}沮喪して断然文学を思切るべく決心した。

だが、世間は作者自身が失望する如くにこの第三篇にも失望しないで、文人は交を求め書肆は原稿を乞うて益々やまなかつたので、文学を思切つた二葉亭はこれらの文人交^{づきあい}際や本屋の応接に堪えられなかつた。日記の一節に曰く、「吉岡書店よりまた『新著百種』をおくりこす、こは第三卷なり、かう発刊の都度々々におくりこすは予にも筆を執らせんとの下^{したところ}心あればなるべし、

そを知りつつ取り置くは愚なり、辞いなみやらんとは思へどもさすがに打付けにさいはんも何となく気の毒にてそのままに打過ぐす、余はかほどまで果敢なき乎、歎なげすべき事の第一なり、」と。また曰く、「書肆某来りて四方山よもやまの物語をす、余はかかる射利の徒と交はるだも心苦しけれどもこれも交際と思ひ返してよきほどにあしらへり、もし心に任せたる世ならましかば彼ら如き輩を謝して明窓淨じようき凡しずかの下に静しずかに書を読むべきを、」と。二葉亭が全く文壇から遠ざかろうとして苦悶していたはこれを見ても明かである。

この決心は第三篇の執筆中から萌きざしていた。あくまでも自分の天分を否定し、文学ではとても生活する能力はないものと断あきら念め、なまなか生なまなか中なまなか天分の乏しいのを知りつつも文学三昧ちんめんに沈ちんめん湮ちんめんするは文学

を冒瀆する罪悪であると思詰め、何とかして他に生活の道を求めて学問才芸を潰つぶしに投なげ売うりしても一家の経済を背負おつて立とうと覚悟した。が、この覚悟はありながら、一面には極めて狷介で人に下るを好まないと同時に、一面には人に対して頗る臆病であつて、伝つてを求めて権門貴戚きせきに伺候するは魯おろか、先輩朋友の間をすらも奔走して頼んで廻るような小利口な真似は生しょう得とく出来得なかつた。どうかにかしなればならないと思いつつもどうにもする事が出来ないで独ひとりで窘きん窮きゆう煩悶はんもんしていた。この苦境を見るに兼ねて、もし仕官する希望でもあるならと片肌かたはだ抜ぬいでくれたのが語学校の旧師の古川常一郎であつた。二葉亭はこの間の消息を日記に洩いらして、官吏は元来心に染まぬが今の場合聊いささかなりとも

俸錢を得て一家を支える事が出来るなら幸いであると古川に頼んで、さてそのあとで、「何となくうら恥かしきやうに心落ちる。白石先生の事など憶出せば背に冷汗を流す」と書いておる。二葉亭の自卑自屈を余儀なくされる窘窮煩悶の状がこの二、三行の文字に見えるようである。

が、結局古川の幹旋あつせんで、古川部下の翻譯官として官報局に出仕したのが明治二十二年の夏であつて、これから以後の数年は生活の保障に漸く安心して暫らく官途に韜晦とうかいし、文壇からは全く縁を絶つて読書に没頭する事が出来た。

七 官報局及び雌伏時代

露語の両川・高橋時代の官報局・精神心理
の研究・罪悪心理と下層研究・最初の家庭
生活の失敗・『片恋』・官報局を去る

二葉亭の仕官を説く前に先ずその恩師古川常一郎を語らねばならない。古川は今から十四、五年前に不遇の中に易えきざく簣なしてしまつたが、今でもなお健在であるはずの市川文吉と聯ならんで露語学界の二大先輩であつた。この両川に二葉亭即ち長谷川を加えて露語の三川と称されておる。不思議な事には両川とも功名心が薄く、

各々数年露国に留学して帰朝した後、しばしば先進の大官から重
 要の椅子いすを薦めすすられても決して肯がえんじないで、一は終生微官に安
 んじ、一は早くから仕官を辞して、功名榮達を白眼冷笑していた。
 殊に古川は留学前はおおくま大隈侯の書生であつて、義弟西源四郎は伊
 藤公の知遇を受けて終に公のふば馬となつた浅からぬ縁故があつた
 から、もし些いささかでも野心があつたらドンナ方面にでも活躍出来た
 のである。が、富貴顯榮を見るどかい土芥に等しく、旧外国語学校廃止
 後は官報局の一属僚を甘んじて世の榮達を冷笑していた。市川文
 吉は多少の資産があつたからでもあろうが、早くから官途を退隱
 して釣道楽に韜晦たうかいしていた。二葉亭はこの両川の薰陶を受けたが、
 就なかんずく中 古川に親近して古川門下のがんえんしろ顔淵子路を任じていた。その

性格の一部が古川に由て作られたのは争われぬ。

当時の官報局は頗る異彩があつた。局長が官界の逸民たる高橋健三で、翻訳課長が学界の隠者たる浜田健次郎、その下に古川常一郎、陸^{くがみのる}実等、いずれも聞ゆる曲^{くせもの}者が顔を列^{なら}べ、而して表玄関の受附には明治の初年に海外旅行免状を二番目に請取つて露国の脳脊髓系を縦断した大旅行家の嵯峨^{さがじゅあん}寿安が控えていた。揃^{そろ}いも揃つて気骨^{きこつり}稜^{りょう}々^{りょう}たる不遇の高材逸足の集合であつて、大隈侯等の維新の当時の築地^{つぎじ}の梁山泊^{りょうざんぱく}知らず、吏臭紛々たる明治の官界史にあつては恐らく当時の官報局ぐらい自由の空氣の横流してはけだし類を絶しているだろう。

高橋健三は官報局の局長室に坐している時でも従五位勲何等の

局長閣下でなくて一個の処士しじあん自恃庵主人であつた。浜田は簡樸質素の学究、古川は卓落不羈ふきの逸民、陸は狷介氣を吐く野客であつた。而して玄関番は高田屋嘉兵衛たかだやかへえ、幸太夫に継いで露国探險者たる一代の奇矯児ききょうじ寿安老人であつた。局長といい課長といい属官というのは職員録の紙の上の空名であつて、堂々たる公衛こうがはあたかも自大相下らざる書生放談の下宿屋の如く、局長閣下の左右一人として吏臭あるものはなく、煩瑣はんさなる吏務を執るよりはむしろ詩を品し画を評し道德を説き政治を談じ、大は世界の形勢より小は折花攀はなりゆう柳の韻事まで高談放論珍説贅議ぜいぎを闘たたかわずに日も足らずであつた。

二葉亭はこの中に投じた。虚文虚礼便べん佞ねい諂てん諛ゆを賤いやしとして仕

官するを欲しなかつた二葉亭もこの意外なる自由の空氣に満足して、局長閣下と盛んに人生問題を論じて大得意であつた。左とに右かくこの間は衣食の安定を得たので、思想を追究するあたかも餓うゆるが如き二葉亭は安心して盛んに読書に没頭した。殊にダーウイン、スペンサー等の英国進化論を専ら研究したが、本来ヘーゲルの流れを汲くむ露国の思想に養われていたから、到底これらの唯物論だけでは満足出来ないで、終にコントに走よつて爰こゝに初めて一道の曙光に接する感があつた。恐らく二葉亭の思想の根本基礎を作つて終生を支配したのはコントのポジテイヴィズムであつたらう。

この時代の愛読書であつて、二葉亭の思想を豊かにし根柢を固くしたのはモーズレーの著述であつた。殊にその『Pathology of

Mind^二は最も熱心に反覆翫味して巨細こさいに研究した。この時分の二葉亭の議論の最後の審判官は何時いつでもモーズレーであつて、何かにつけてはモーズレーを引合に出した。『浮雲』に二箇処まで見えるサリーやペインも愛読書であつて、サリーの所説はしばしば議論の典拠となつたが、殊に傾倒していたのはモーズレーの研究法であつた。

が、二葉亭は如何なる場合にも批評家であつた。科学を除いては総てすべの研究は空理であるといつても科学にもまた不満足であつて、科学に偏するスペンサーの哲学の如きも或る程度以上は決して推服していなかつた。かつ常に曰く、「科学となると全然無識だから、勢かぶとい兜を脱いで降参しなけりやならぬが、例えば22

が4というは欺くべからざる確實の数理であつても、科学者が天体を観測するに方あたつて毫釐ごうりの違算がしばしば何千万億の錯誤きたを来すと同様に、眼前の研究にもまた同じ誤算がないとは限らない。

数その物は確實であつても数を算出する運算の方式は必ずしも正しいとは信じられない、」と。この理由からして科学者の説を有力な参考としていても或る程度以上はやはり余り信仰しなかつた。「科学者というものは枝ぶりや花ばかりを気にして根を枯らすを忘れる素しろうと人植木屋のようなものだ、」といつていた。

呉くれしゆうぞう秀三博士の『精神啓微』や『精神病者の書態』を愛読して、親しく呉博士を訪おとうて蘊うんちく蓄たくを叩たたいたのはやはりその頃であつた。続いてロンブロゾ一派の著書を搜さぐつて、白痴教育、感化事

業、刑事人類学等に興味を持ち、日本の現時の教育家や宗教家がこれらの科学的知識を欠くため渠かれらの手に成る救済事業が往々無用の徒勞に終るを遺憾とし、自ら感化院を創はじめて不良少年の陶冶とうやや罪人の矯正をしようという計画を立てた事もあつた。

無論書齋の空想で、実行する意つもりがあつたとも思われなかつたが、計画は頗る科学的であつた。当時の二葉亭の説を簡単に搔か摘つまむと、善といひ悪というは精神の健全不健全の謂いで、いわゆる敗徳者、墮落者、悪人、罪人等は皆精神の欠陥を有する病人である、その根本の病因を医いさやないで訓誡、懲罰、刑けい辟へきを加へても何の効があるはずがない。今日の感化院が科学の教養のない道学先生に経営され、今日の監獄が牛頭馬頭ごずめずに等しい無智なる司獄官に一

任される間は百年河清を待つかせいも悪人や罪人の根を絶やす事は決して出来ない。それよりも先ず一種の特殊精神病院を建設していわゆる不良少年や罪人を収容し、最新科学の研究を応用して渠らの感覚欠如や精神欠陥を精査し、根本の病因を究めてこれを医療するのが科学的でもありかつ有効でもある。尤も今日の科学はマダ研究が足りないから、罪人や不良少年に対する根本的精神療法もマダ十分に攻究されていないが、先ず一つの実験所を作るツモリで科学的手段を応用する感化院や監獄を設置し、あたかも病人に対する医者の態度で渠らの犯罪や悪癖に対する対症療法を研究するが社会政策上最も急務である。これまでのいわゆる哲学や宗教や道徳や法律は皆この根本の人間の疾患にたちいた立到らない空理空文

である。もしこの精神的欠陥に対する心理療法が完成したなら古今の聖賢の教訓は総て皆廢紙となつてしまふといふのがその頃の二葉亭の説であつた。

この説はモーズレーやロンブロゾから得たので、二葉亭自身の創見ではなかつた。かつ近世心理学の片端かたはしをだも囁かじつてるものなら誰でも心得てる格別目新らしくもない説であるし、今ではこの一派の学説は古臭くなつてる。が、二葉亭は総てこの見地から人を見ていた。例えば下層社会の低劣な品性の如きも教育の不備よりはむしろ精神欠陥に歸し、一時好んで下層社会に出入するやライフの研究者を任ずると共に下層社会に共通する悪俗汚習の病因たる精神欠陥を救ふの教師を自任し、細つぶさに下級の生活状態を

究めて種々の自己流の精神医療の方法を案出して試みた。尤もこの試みは大抵失敗して、傍観者からは頗る滑稽こっけいに思われた事もあつたが、本人自身は一生懸命で、この失敗を来す所以は畢ゆえん ひつきよ竟う科学の素養を欠くから応病与薬の適切な方法を案出する事が出来ないのだと考えて益々研究に深入した。一時はその手段の一つとしての禅の研究を思い付き、『禅門法語集』や『白隠全集』はくいんを頻りに精読し、禅宗の雑誌まで購読し、熱心銳意して禅の工夫くふうに耽ふけっていた。が、衛養療法や静座法を研究する意で千家つもり せんけの茶事を学ぶに等しい二葉亭の態度では禅に満足出来るはずがないのが当然で、結局禅には全く失望した。禅は思想上のキョーリオ、精神上の催眠剤であつて、今日の紛糾錯綜入乱れた文化の葛藤を解

決し制せいぎよ馭する威力のないものであるというのが二葉亭の禪に対する断案で、何かの茶ちやばなし咄のついでに一いつきゆう休は売僧まいす、白隠は落語家、桃とうすい水和尚はモーズレーの研究資料だと茶かした事があつた。

結局書齋の研究ばかりでは満足出来ないで、学者の畑はたけすいれん水練は何の役にも立たぬからと、実際に人事の紛糾に触れて人生あしわを味おうとし、この好奇心に煽あおられてしばしば社会の暗黒面に出入した。役所に遠いのを仮かこつけ托に、猿ざるがくちよう柴町の親の家を離れて四谷よつやの津つの守かみの女の写真屋の二階に下宿した事もあつた。神田の皆みなが川わちよう町の桶屋おけやの二階に同居した事もあつた。奇妙な風体ふうていをして——例えば洋服の上に羽織を引掛けて肩から瓢ひょうたん箆さを提げる

というような変へんてこな扮装なりをして田舎いなかの達磨茶屋だるまぢやを遊び廻まわつたり、
 印しるし絆ばん纏てんに弥蔵やぞうをきめ込んで職人の仲間へ入いつて見みたり、そう
 かと思うと洋服に高帽子で居酒屋に飛込んで見みたり、垢染あかじみた綿
 服の尻からげか何かで立派な料理屋へ澄すまして入いつて見みたり、大
 袈裟おげさに威張いばり散さんらして一文も祝儀をやらなかつたり、わざと思切しつ
 て吝しみつたれな真似まねをした挙句あげくに過あ分げな茶代を氣張きつて見みたり、シ
 ンネリムツツリと仙ぶつち頂ちようづら面めんをして置いて急はしやに騒さわいで
 見みたり、故こと更さらに桁けたを外はずれた馬鹿々々しい種々雑多な真似まねをして
 一々その經驗あじわを味あつて見みて、これが人生ジーズニだよと喜よろこんでいた。

殊ことにその頃は好すんで下層社会げさうに入い出し、旅行りょ行ぎんをする時ときも立派りつぱな
 旅館りょ館かんよりは商人宿しやうや達磨茶屋だるまぢやに泊とつたり、東京とうきやうにいても居酒屋い屋や

やたいみせ
 屋台店へ飛込んで八さん熊さんと列んで醤油樽しょうゆだるに腰を掛けて
 さかぎ
 酒盃さかぎの献酬とりやりをしたりして、人間の美くしい天真はお化粧をし
 りようら
 て綾羅りようらに包まれてる高等社会には決して現われないで、垢面こうめん
 らんる
 襤褸らんるの下層者にかえつて真のヒューマニチイを見る事が出来る
 といつていた。この断案の中に真理がない事はないが、この偏寄かたよ
 った下層興味にしばしば誤あまられて、例えば婦人を観察するに方あた
 つても、英語の出来るお嬢さんや女学校出の若い奥さんは人形同
 様あで何の役にも立たないと頭けなから蔑あしつけ、下等女の阿婆摺あばずれを活
 動力あに富んでると感服したり、貧乏人の娘なりが汚あない扮装なりをして怯
 めず臆あせず平気な顔あをしているのを虚栄とらに倅とらわれない天真爛漫と
 解釈あしたり、飛んでもない見当違いあをする事が度々たびたびであつた。

同じ見当違いからして罪人や墮落漢や敗徳者に極端に同情し、時としては同情を通り越してやたらと讚美し、あたかも渠らの総てが皆ショーペンハワーやニーチエのような天才であつて、社会の圧迫に余儀なくされ、あるいは求めて反抗して誤まつて岐路に奔つた^{はし}気の毒な犠牲であるように考えていた。少くも渠らが世間の道徳に背いたには^{そむ}疚しくも恥かしくもない立派な哲学的根拠があるように思つていた。この考察も万^{まんざら}更見当違いでなく、世には確かに二葉亭の信ずるような^{よんどこ}拠らない境遇の犠牲となつて墮落した天才や、立派な主張を持つてる敗徳者もあるにはあるが、二葉亭は一切の罪人や墮落者の罪悪を強^{しい}て肯定する気味合があつた。殊に貧民に対しては異常な同感を払つて、もし人間から学問技芸

等のお化粧を奪つて裸一貫の露出むきだしとしたなら、貧乏人の人格の方が遙はるかに高等社会に勝まさつていと常にいつていた。この説もまた必ずしも見当違いでなく、無知文盲なる貧民階級に往々縉紳しんしん貴族に勝るの立派な人格者を見出す事も稀まれにはあるが二葉亭は強てイリユージョンを作つて総ての貧民を理想化して見ていた。

この見地からして二葉亭は無知なる腹掛はらがけ股引ももひきの職人を紳士と見て交際し、白粉おしろいを塗つた淪落りんらくの女を貴夫人同様に待遇し、渠らに恩恵を施しつつ道德を説き、渠らを罪惡の淵ふちから救うて真人たらしむべく種々の手段を講じた。が、実行については全く失敗した。晩年或る時、この時代の誤解や失敗の経験を語つて曰く、「あの時代、むやみと下層社会が恋しかつたのは、やはり露国の

小説に誤まれたのだ。スラヴ人は元来空想に耽^{ふけ}る国民性だから、無教育者の中にも意外な推理力や想像力を蓄えて人生をフィロソフアイズするものがある。露西亜は階級制度の嚴重な国だから立派な学問権識があつても下層に生れたものは終生下層に沈淪しておらねばならない。その結果が意外な根柢ある革命的煽^{せんどう}動が下層社会に初まつたり、美くしいヒューマニチーが貧民の間に発現されたりする。露国の小説にはこの間の消息がしばしば洩^洩らされて下層社会のために気を吐いている。こういう小説に読耽^{せん}つたもんだから自然下層社会に興味を持つようになったが、日本の下層社会は根本から駄目だ。精神の欠乏が物質の不足以上だから、何を説いても空々寂々で少しも理解しない。倫理も哲学もあつたも

んじやない、根柢からして腐敗し切っていて到底救うべからずだ——」と日本の下級者の無知無恥に愛想を尽かしていた。こういう見当違いをしたのはツマリ理想負けがしたので、二葉亭の面目はこういう失敗にかえつて躍如しておる。

官報局に出仕する間もなく二葉亭は家庭を作つて両親と別居し

た。初めは仲猿楽町に新居を構えたが、その後真砂町、皆川町、

飯田町、東片町としばしば転居した。皆川町から飯田町時

代は児供が二人となつた上に細君（先妻）の妹を二人までも引取り、両親にも仕送っていたから、家計は常に不足がちであつた。

その上に二葉亭は、ドチラかという浪費家であつて、衣服や道具には無頓着であつたが食物にはかなりな贅沢をした。加

かのみ
 之ならず、その頃の先妻は家政を料理する才が欠けていて、二人が二人とも揃そろつて経済に無茶であつたから、さらぬだに不足がちの家計が一層紊びんらん乱して、内証は岡目に解らぬほどの不如意ふによいを極めていた。

かつ加うるに夫婦の間が始終折合あわないうで、沈黙の衝突が度々繰返された。その間の紛糾いりぐんだ事情は余り深く立入る必要はないが、左とに右かく夫妻の身分教養が著るしく懸隔して、互に相理解し相融合するには余りに距離があり過ぎたのが原因であつた。公平に見たなら二葉亭の方が暴君で、細君の方は極めて柔順な奴隷であつたろうが、夫婦の間が暴君と奴隷との関係では互に満足出来るはずがないから、あたかも利刃きを揮ふるつて泥土きを斬きるに等しい何

らの手答えのない葛藤を何年か続けた後に、二葉亭は終に力負け根負けがして草臥れてしまった。二葉亭のためにも勿論不幸であつたが、細君の方にも同情すべき気の毒な事情があつた。とうとう最後が破縁となつて、善後の処分をするために二葉亭は金を作らねばならなくなつた。

その時分、文壇の機運はいよいよ益々爛熟し、紅露は相對墨して互に覇を称し、鷗外は千朶山房に群賢を集めて獅子吼し、逍遙は門下の才俊を率いて早稲田に威武を張り、樗牛は新たに起つて旗幟を振り、四方の英才俊髦一時に崛起して雄を競うていた。二葉亭は『浮雲』以後全く韜晦してこの文壇の氣運を白眼冷視し、一時莫逆を結んだ逍遙とも音信を絶していたが、

丁度その頃より少し以前、逍遙と二葉亭とは偶然私の家で邂逅かいこうして久闊きゆうかつを叙し、それから再び往来するようになっていた。

その頃『早稲田文学』を根城ねじろとして専ら新劇の鼓吹に腐心していた逍遙は頻りに二葉亭の再起を促がしつゝあつたが、折も折、時なる哉かな、二葉亭はこの一家の葛藤の善後処分を逍遙に謀はかつた結果、終に再び筆を操とるべく余儀なくされたのがツルゲーネフの『アーシャ』即ち『片恋』の翻譯であつた。

その時は明治二十九年の十二月、即ち『浮雲』第三篇発表後八年目であつた。世間はあたかも暫らく消息不明であつた遠征将軍が万里の旅から凱旋したのを迎えるように歓呼した。が、二葉亭自身は一時の経済上の必要のため抛なるなく筆を操つたので、再び

文壇に帰るツモリは毫すこしもなかつた。文学に対する態度もまた随したがつて以前とは全く違つて、一生の使命とするというような意気込も理想や抱負も全まるで失なくなつていた。以前は重く感じた責任をも感じなくなつて、「自分は文人でない」と文学とは絶縁した意つもりでいたから、ツルゲーネフを訳したのも唯ほんの一時の融通のための拠ろないドラツジエリーで、官報局で外字新聞を翻訳した時と同じ心持であつた。尤も二葉亭は外字新聞を翻訳するにもやはり相当な苦辛をした。如何にドラツジエリーのツモリでもツルゲーネフを外字新聞並なみに片附ける事は二葉亭の性しょうぶん分として出来得なかつた。が、その心持は以前と違つて遙かに気楽であつた。それゆえ『片恋』一冊すいせいぎりで再び彗星せいせいの如く隠れてしまふ意つもりであつた

が、財政上の必要が『片恋』一冊の原稿料では充たすに足りなかつたので、あたかも凱旋將軍を迎える如くに争い集まる書肆の要求を無下に斥ける事も出来なかつた。

折からあたかも官報局長は更任して、卓落不羈なる処士高橋自恃庵は去つて、晨亭門下の叔孫通たる奥田義人が代つてその椅子に坐した。奥田は東京市の名市長として最後の光榮を樞に飾つたが、本来官僚の寵児で、礼儀三千威儀三百の官人氣質の権化であつたから、豪放洒脱な官界の逸人高橋自恃庵が作つた放縦自由な空気は忽ち一掃されて吏臭紛々たる官場と化してしまつた。陸や浜田は早くも去つて古川一人が自恃庵の残墨に拠つていたが、区々たる官僚の規矩を守るを屑よくしないスラヴの変

形たる老書生が官人氣質の小叔孫通と容れるはずがないから、暫らく無言の睨み合いをした後終に引退してしまった。二葉亭は本来けんかい狷介不羈なる性質として迎合屈從を一要件とする俗吏を甘んじていられないのが当然であつて、八年の長い間を官報局吏として辛抱していたのは、上に自由なる高橋健三をいた戴いて、恩師古川の下に吏務に服していたからであつた。高橋が去り古川が罷める以上はイツマデ腰弁を甘んずる義理も興味もないので、古川が罷めると間もなく自分も辞職してしまつた。二葉亭の一生中、その位置に満足してこつこつ々として職務をたのし楽しんでいたは官報局の雌伏時代のみであつた。

八 放浪時代から語学校教授

原稿生活・実業熱・海軍編修・語学校教授

官報局を罷めてから暫らく放浪していた。その間に海軍の編修書記ともなり陸軍の嘱托教師ともなったが、ドレもこれも一時の腰掛であつて、初めからその椅子に安んずる意は少しもなかつたのだ。ツルゲーネフの『ルージン』を初めゴーゴリやガルシンの短篇の翻訳にクツクツとなつて『新小説』や『太陽』や『文芸俱樂部』に寄稿したのはその時代であつた。

が、文壇的活動は元来本志でなく、一時の方便として余儀なくされたのだから、その日その日を糊口ここうする外には何の野心もなかつた。

った。『浮雲』第三編が発表された『都の花』を請取った時は手が慄ふるえたというほどの神経質にも似合わず、この時代は文壇的には無関心であつて世間の毀誉褒貶きよほうへんは全く風馬牛ふうばぎゆうであつた。同じ翻訳をするにも『あいびき』や『めぐりあい』時代と違つて余り原文には拘束くそくされないで、自由きよま氣儘きまにグングン訳し、「昔のような糞くそ正直まねな所為まねはしない、拙ますい処まはドンドン直してやる」と、しばしば豪語えいごしていた。が、興きんに乗じたきえん氣焰きえんの飛沫とばしりで豪えいごそうえらな事をいつても、根が細心周密な神経質の二葉亭には勝手に原文を抜かしたり変えたりするような不誠実まねな所為まねは決して出来ない。「むやみと訳しなぐるんだ」といいつつも世間の尋常翻訳と比べてはやはり忠実に原文に従つていた。

が、イクラ訳しなぐるツモリでいても、世間の賃訳ちんやくをするもののような無責任にはなれないのが二葉亭の性分であつた。例え
ば『浮草うきくさ』の如き丁度関節炎を憂いて足腰あしこしが起たたないで臥ねいた最中で、病床に腹はらんばい這いになつて病苦と闘いながらポツポツ
訳し、三十枚四十枚と訳しおわると直ぐ読返しもしないで金に換
えたものであるが、それでも二葉亭の翻譯ほしままとしてはかなり不手際ふてぎわ
であつても、英訳本と対照するにやはり擅ほしままに原文を抜いたり変え
たりした箇所は少しもなかつた。イクラ訳しなぐる意つもりでも二葉亭
には訳しなぐる事は出来なかつた。

二葉亭が官報局を罷めた直接の原因は局長の更任に続いて恩師
古川の理由なき罷免に対する不満であつたが、それ以外に何時いつか

は俗吏の圈内を脱して自由の天地に 翺 翔 しよう しようとする予ての かね
 志望が幫助 てつだ っていた。本 も と本と二葉亭は軍事であれ外交であれ、
 と と 左に右 か 何であろうとも東亜の舞台に立つて活動したいのが 夙 しゆく
 昔 せき の志であつた。軍人たらんと欲して失敗し、外交家たらんと
 願うてまた蹉躓 さち し、抛 な ろなしに一時横道に外 そ れて文学三昧に遊ん
 でいたが、夙昔の志望は決して消磨したのではなかつた。官報局
 に在職中、哲学や精神生理に頻りに興味を持つて研究していたが、
 東亜の国際関係や産業等の調査はこれがために少しも怠 た たらな
 いで継続していたので、一度は東亜の舞台に躍り出して一と芝居打
 とうとする念は片時も絶えなかつた。官報局を罷めたのは偶然で
 あるが、退職すると同時にこの野心 にわか が俄に活火山の如く燃上つて

来た。

然るに野心を充たすための計画は浮んで来ても、何をするにも先立つ金を作るは決して容易でなかった。一家の葛藤を処理するための聊かの金ですらが筆の稼ぎでは手取早く調達しがたいのを染々と感じた渠は、「文学ではとても駄目だ。金儲け、金儲け！」と心の底から叫ぶようになった。加之ならず、語学校時代の友人の多くは実業界に投じ、中には立派に成功して財界の頭あたまかぶ株かぶに数えられてるものもあるので、折に触れて渠らと邂逅して渠らの辣手らっしゅを振う経営ぶりを目のあたりに見る度毎たんびに自分の経済的手腕てくわんの実は余り頼りにならないのを内心危あぶなツかしく思いながらも脾肉ひにくに堪えられなかった。その度毎に独語して「金儲

け、金儲け！」と呟つぶやきつつ金儲け専門の実業界に乗出そうとした。

その必要からして、官報局を罷めた後の二葉亭は俄へんに辺幅へんぶくを

飾なりるようになった。一体衣服なりには少しも頓着とんちやくしない方で、親譲り

の古ぼけた銘仙めいせんにメレンスの兵児帯へこおびで何処どこへでも押掛けたのが、

俄なりに美服を新調して着飾り出した。「これが資本だ、コンナ服装なり

をしないと相手になつてくれない」と常綺羅じようきらで押出し、学校以

来疎縁まぢあとなつた同窓の実業家連と盛んに交際し初めて、随分待

合あ入りまでもして渠かれらと提携する金儲けの機会うかがを覘うかがっていた。

が、二葉亭の方は心の底から真剣であつても、対手あいての方は少しも

マジメに請取まじめつてくれなかつた。

「右の手に算盤そろばんを持って、左の手に剣にぎを把うしり、背ろの壁に東亞

図を掛けて、懐ろふとこには刑事人類学を入れて置く、これではなければ不可いかん、「などと頻しきりに空想を談じていた。尤も座興の戯れで、如何に二葉亭が世間に暗くてもこれほど空想的では決してなかった。が、こういう座興の戯れが折角実業界へ飛込もうとするマジメな希望をどれほど妨げたかは解らなかつた。かつまた、これほど空想的でなかつたにしろ、極めて平凡な常識いってんぱり一点張いってんぱりの実業家氣質から見れば二葉亭の実業論が非常な空想を加味していたのは争われなかつた。第一、実業家の金儲けは金を儲けるための金儲けであつて、金を以て始まり金を以て終るが、二葉亭の金儲けは何時いつでも人道または国家の背景を背負っているのが不用意の座談の中にも現われていたから、実業界に飛込むマジメな志はあつて

も相手になつて機会を与えてくれるものは一人もなかつた。

加^{しかのみ}之ならず、一方には生活上抛るなしに続々翻訳し、心にも

ない文学上の談話が度々雑誌に載せられて文名が日に益々高くなるので実業界の友人からはいよいよ文人扱いされ、マジメに実業談を試みても一笑に附されてしまった。「小説なんぞを書いてちやアとても駄目だ、全^{まる}で相手にしてくれない、」と度々不平を洩^もらしていた。

二葉亭を海軍編修書記に推薦したはやはり旧友の一人たる鈴木某（その頃海軍主計大監）の幹^{あつせん}旋であつた。鈴木は極めて粗放な軍人肌であつて、二葉亭の人物や抱負を理解もしなければ理解しようとも思わず、ただ二葉亭が浪人しているのを気の毒がつて

幹旋してくれたので、「丁度君には適當の位置だ。こうして辛抱していれば追々高等官になれる、」と大いに兄貴ぶりを發揮して二葉亭に辛抱を勧告した。

「親切な好い男だが、高等官になれば誰でも満足するものと思つてる、」と二葉亭は苦にがり切つていた。（鈴木は日露戦争後は海軍を引退して実業界の諸方面に頭を突込んでいたが、位階勲等を持つてる軍人だから、置き物に祭り上げられるだけで一向花々しい成功もしなかつたようだ。今はドウしているかサツパリ消息を聞かない。）

語学校の教授となつたのはそれから間もなく、明治三十二年の九月であつた。高等官の教授を榮としたわけではないが、露語科

の主任たる恩師古川の推挙を満足して喜んで就任した。古川はその後いくばくもなく病氣のため辞職したので、二葉亭は代つて主任の椅子に坐した。

教師としての二葉亭は極めて^{ていねい}丁寧親切であつて、諸生の頭に徹底するまで反覆教授して少しも倦^うまなかつた。だが、それよりもなおヨリ多く諸生を心服させたのは二葉亭の鼓吹した学風であつた。およそ語学は先ず民族の研究から初めなければならぬ。要と、日露の地理的關係から生ずる露語学者の特殊の使命というような事を語学を教授する傍^{かたわ}ら常に怠たらず力説し、尋常語学の学習以上に露語学者としての特殊の気風を作るに少からず腐心した。同時に露語に交渉する各会社各事業から浦^{ウラジ}塩^オの商人にまで

連絡をつけて卒業生の生活の便宜まで心配した。二葉亭が語学校に在任したのは僅か^{わず}に三年であつたが、その人格はあまねく露語学生を薰化して、先進市川及び古川と聯^{なら}んで露語の三川と仰がれるまで悦服された。日露戦争に参加して抜群の功績を挙げた露語通訳官の多くは二葉亭の薰陶を受けたものであつた。

九 哈爾賓行

二葉亭独特の実業論・女郎屋論・哈爾賓の

生活及び奇禍

が、二葉亭は長く語学校の椅子に安んずる事が出来なかつた。

本と本と教職に就いたは恩師の推薦を徳としたためで、教育家を一生の仕事とするツモリはなかつたのだから、暫らくすると一時鎮静した実業熱が再び沸熱して来た。

あたかもその時分、暫らく西比利亞シベリアに滞留していた旧同窓の佐波が浦塩から帰朝してしばしば二葉亭を訪問し、新たに薩哈連サハリンから浦塩へ渡航した一人の友人からも度々手紙が来て、浦塩方面の消息が頻りに耳に入るので、機会を待構えていた実業上の野心は忽ちムクムクと頭を擡もちあ上げて食指俄に動くの感に堪えなかつた。

二葉亭の実業というは単なる金儲けいってんぼり一天張ではなかつた。実業側の友人から余り相手にされなかつたはこれがためであつたが、二葉亭の夙しゆくせき昔の希望からいえば一貫した国際的興味を有する

問題であつた。二葉亭にいわせると、日本人が浦塩あたりで盛んに商売するのは、当人自身は金儲けより外考えないでも、これが即ち日本の勢力を扶植する所以であるから、商売の種類は何であろうともかま関わぬ、海外の金儲けは即ち国富の膨脹、国権の伸長、国威の宣揚である。極端な例を挙げれば、醜業婦の渡航を国辱である如く騒ぐは短見者流の島国的愛国論であつて、醜業婦の行く処必ず日本の商品を伴い日本の商業を発達させ日本の地盤を固めて行く。東露に若干たりとも日本の商業を拡げる事が出来たのは全く醜業婦のお庇かげである。露国は自国の商工業を保護するために外国貨物に重税を課し、例えば日本の燐寸マツチの如き一本イクラに売らねばならぬほどの準禁止税を賦課している。が、こういう極端

な保護政策を取って外国貨物を塗絶しようとしているが、独り外
国醜業婦の移入に限っては殖民政策の必要から非常に歓迎し、上
陸後もまた頗る好遇して營業の安全及び利益を隱然保護している。
浦塩における日本の商売が盛んに発展しつつあるは畢竟醜業婦の
背後に隠れて活動する結果であるから、この特惠に乗じていよいよ
益々多数の醜業婦を輸出するは取も直さず益々日本の商業を振
う所以である、というのがその頃しばしば二葉亭に力説された醜
業婦論であつた。

二葉亭の醜業婦論は一時交友間に有名であつた。その頃二葉亭
の家に出入したものは大抵一度は醜業婦論を聞かされた。二葉亭
の説に由ると、日本の醜業婦の勢力は露人を風化して次第に日本

雑貨の使用を促がし、例えばかつおぶし鰹節が極めて滋味あり衛養ある食料品として露人の間に珍重されて、近年俄に鰹節の輸出を激増したのは露人が日本の醜業婦に教えられた結果である。かつ日本の醜業婦の露人に落籍されるものが益々多く、中には案外なる上流階級の主婦となるものさえあつて、これがために日本風の生活が露人間に流行し、日本品でなければ上等でないように思うものが段々殖ふえて来た。その結果が日本の商品の販路拡張となり、日露両国民の相互の理解となり、国際上の無言の勢力となるから、もし資本家の保護があれば国際上の最良政策としても浦塩へ行つて女郎屋を初めるといつていた。この女郎屋論は座興の空談でなくして案外マジメな実行的基礎を持つてゐるらしかったが、余り突と

梯ついでだから誰もマジメに聞かなかつた。二葉亭と実業というさえも大抵な人の耳には奇怪に響いた。ましてや二葉亭と女郎屋というに到つては小説の趣向を聞くと同じ興味を以て聞くより外なかつた。

左とに右かく二葉亭の実業というは女郎屋に限らず、総すべて単なる金儲けではなかつた。金に逼ひっばく迫していたから金も儲けたかつたろうが、金を儲ける以外に大なる経けいりん綸があつた。その経綸が実業家の眼から見るといふべくして行うべからざる空想であつたから、偶々たまたまその方面の有力者に話しても聞棄ききすてにされるばかりで話に乗つてくれなかつた。

然るに浦塩の友なる佐波武雄が浦塩の商人徳永と一緒に帰朝し

て偶然二葉亭を訪問したのが二葉亭の希望を果す機会となった。佐波はそれまで二葉亭から度々浦塩渡航の希望を洩らされても、文人の性格と商売とは一致しないという理由から無理を説いていたが、どういうキツカケからか三人が相会して一夕の交歓を尽した席上、徳永商店の顧問として二葉亭を聘^{へい}そうという相談が熟した。その頃浦塩で最も盛んに商売していたのは杉浦龍吉で、杉浦が露国における日本の商人を代表していた。徳永は新進であったが、杉浦と拮^{きつこう}抗して大いに雄飛しようとし、あたかも哈爾賓^{ハルビン}に手を伸ばして新たに支店を開こうとする際であつたから、どういふ方面に二葉亭の力を煩^{わづ}わす意^{もり}があつたか知らぬが、哈爾賓の支店に遊び半分来てくれないかといった。二葉亭は徳永とは初対面

であつたが、徳永の人物を臂ひじを把とつて共に語るに足ると思込み、その報酬は漸ようやく東京の一家を支うに過ぎない位であつたが、極めて束縛されない寛大な条件を徳として、予かねての素志を貫徹く足掛りには持つて来いであると喜んで快諾した。かつあたかも語学校の校長高楠たかくすと衝突して心中不愉快に堪えられなかつた際だつたから、決然語学校の椅子を拋棄ほうきして出掛ける氣になつた。多くの友人の中には折角足場の固くなり掛けた語学校の椅子を棄てるを惜おしんで切に忠告するものもあつた。家族は前途を危ぶんで余り進まなかつた。加之ならず語学校の僚友及び学生は留任を希望して嘆願した。が、二葉亭は宝の山へ入る如き希望を抱いて、三十五年の五月末に断然語学校を辞職すると直ちに東京を出発した。

この西比利亞行については色々な説がある。竇ただに徳永商店の招聘に応じたばかりでなく、別に或筋からの使命を受けていたという説もある。が、恐らくは一個の想像説であらう。二葉亭は早くから国際的興味を有して或る場合には随分熱狂していた。が、秘密の使命を果すに適當な人物では決してなかつた。二葉亭の人物を見立ててそんな使命を托する人もあるまいし、托せられて輕率に応ずる二葉亭でもなかつた。かつもしそんな使命を受けていたなら、二葉亭は最少もすこし豊かであるべきはずであつたが、哈爾賓到着後は万事が予想と反して思うようにならなかつたのみならず、財政上にもまた頗る窮乏して自分自身はなお更、留守宅への送金もまた予期の如くならざるほど頗る困迫していた。

東京を出発する前、二葉亭は暇いとまご乞こいに来て、「何も特別の用務はないので、ただ来てさえくれれば宜よいというのだ。露西亞では官憲の交渉が七面倒臭いから、多分そんな方面にでも向ける意つもりだろう。左とに右かく来いというから行って見るので、その中うちに面白い仕事が見付かったらそっちへ行ってしまおうのサ、」と無造作にいった。

が、哈爾賓へ行つて何をした？ 縦令聊たといかにもせよ旅費まで出して呼ぶからには必ず何かの思わくが徳永にあったに違いない。が、二葉亭が着くと間もなく哈爾賓では猛烈な虎疫コレラが流行して毎日八百五十人という新患者を生じ、シカモ防疫設備が成つておらたるので患者の大部分が斃たおれてしまふという騒ぎであつたから、市

民は驚慌して商売は殆んど閉止してしまつた。搗かてて加えてその頃から外国人、殊に日本人に対して厳しく警戒し、動やともすると軍事探偵視して直ぐ逮捕した。或る日本人は馬車の中で寺院の写真を見ていた処を警吏に見咎みとがめられて十日間抑留された。また他の或る日本人は或る工事を請負つて職工を捜すため浦塩哈爾賓間を数度往復したので三カ月の禁錮きんこに処された。日本人という日本人は皆こういう常識では理解されない無法な圧迫を受けたから手も足も出せなくなつた。大いに発展するツモリの徳永商店も手を伸ばすどころか圧迫されて縮少しなければならなくなつた。

搗かてて加えて哈爾賓へ着く草々詰らぬ奇禍を買つて拘留された。当時哈爾賓では畜犬箝かんこうれい口令しが布かれ、箝かんこうれい口せざる犬は野犬と見み

做なされて撲殺された。然るに徳永商店では教頭の飼犬の中の一頭だけ轡くつわを施こして鎖つなで繋いだが、残りの何頭かは野犬として解放してしまった。すると或る日、その中の一頭が巡査に吠ほえつ付き、追われて元の飼主たる徳永商店に逃込んだのを巡査は追掛けて来て、店から引摺ひきずり出して店前で撲殺し、かつ徳永を飼主と認定するゆえ即時に始末書を警察へ出せと厳命した。丁度二葉亭は居合わせたので不法を詰なつてかれこれ押問答をすると、無法にも二、三人の巡査が一度に二葉亭に躍おどり蒐かつて戸外へ突飛ばし、四の五のいわざず拘引して留置かん檻へ投げ込んでしまった。徳永店員を初め在留日本人はこの報を得て喫び驚くし、重立つものが数人警察署へ出頭して嘆願し、二葉亭が徳永店員でない事を証明したので一時間

経たない中に放還され、同時に二葉亭の身分や位置が解つたので、その晩巡査部長がわざわざ来訪して全く部下の一時の誤解であつたから何分穩便にしてくれと平詫ひらあやまりに陳謝して、事件は何でもなく容易に落着したが、詰らぬ事で飛んだ目に会つた。二葉亭が軍事探偵の嫌疑で二ヶ月か三月も拘禁されたように噂うわさされ、これに關聯して秘密の使命を受けていたかのような想像説まで生じたのは多分この事が訛伝かてんされたのであろう。事實は犬の間違であつたのだ。

こんな咄はなしにもならない馬鹿々々しい目に会つて二葉亭は幾分か気を腐らせた。もともと初めから徳永商店に長く粘り着こびいてる心持はなく、徳永を踏ふみだい台にして他の仕事を見付けつもりる意でいたのだ

から、日本人の仕事が一も二もなく抑え^{おさ}つけられて手も足も出せない当時の哈爾濱の事情を見ては、この上永く沈着^{おちつ}く気になれなくなつた。そこで哈爾濱を中心として北滿一帯東蒙古に到るの商業、物産、貨物の集散、交通輸送の状況等を細^{つぶ}さに調査した後、終^{つい}に東清鉄道沿線の南滿各地を視察しつつ大連、旅順から營口^{えいこう}を経て北京^{ペキン}へ行つた。

十 北京時代

川島浪速と佐々木照山・提調時代の生活・

衝突帰朝

北京へ行つた目的は極東の舞台の中心たる北京の政情を視察する傍ら支那を知るための必要上、本場の支那語を勉強するツモリであつたのである。幸い旧語学校の同窓の川島浪速なになわがその頃警務学堂監督として北京に在任して声望隆々日の出の勢いであつたので、久しぶりで訪問して旧情をあたた暖めかたがた志望を打明けて相談したところが、一夕の歓談が忽ち肝胆相照らして終に川島の配下に学堂の提調に就任する事となつた。

川島浪速の名は今では知らないものはない。満洲朝滅亡後北京の舞台を去つて帰朝し、近年浅間の山荘に雌伏して静かに形勢を觀望しているが、川島の名はしゆくしんのう肅親王の姻親としてふくへき復辟派の日本人の巨頭としてぐかう嶋を負うの虎の如くに今でも恐れられておる。

旧語学校の支那語科出身で、若い東方策士のグループの一人として二葉亭とは学校時代からの親交であった。旧語学校廃校後はさ
らでも需要の少ない支那語科の出身は皆窮乏していたが、殊に川
島は『三国志』か『水滸伝』すいこてんからでも抜け出して来たような豪
傑肌だったから他にも容れられず自らも求めようともしないで陋
うこう巷に窮居し、一時は朝夕にも差さしつか支えて幼き弟妹が餓うえに泣くほ
どのドン底に落ちた。団匪事件だんぴの時、陸軍通訳として招集され、
従軍中しばしば清廷の宗室大官と親近する中に計らずも肅親王の
知遇を得たのが青雲の機縁となった。事件落着後清廷が目覚めて
改革を行わんとするや、川島は肅親王府に厚聘されて警務学堂を
創設し、每期四百名の学生を養うて清国警察を補充し、ただ啻に学堂

教務を統^すぶるのみならず学堂出身者の任命の詮^{せん}衡^{こう}及び進退^{ちゆう}黜^つ
ちよく
 陟^{しよく}等総てを委任するといふ重い権限で監督に任じた。当時の
 (あるいは今でも)支那の軍制は極めて不備であつて、各省兵勇
 はあたかも烏合^{うごう}の無頼漢のようなものだったから、組織的に訓練
 された学堂出身の警吏は兵勇よりも信頼されて事実上軍務をも帯
 びていた。随^{したが}つてこれを統率する川島の威権は我が警視総監以上
 であつて、肅親王を背後の力として声威隆々中外を圧する勢いで
 あつた。

提調というは監督の下に総教習と聯^すび立つ学堂事務の総轄者で
 あつた。出納庶務から人事の一切を綜^すべ、学堂の機密にも参^まじ外
 部の交渉にも當^あつて、あたかも大蔵と内務と外務とを兼掌してい

たから、任務は頗る重くて極めて困難であつた。二葉亭は生なまなか中

文名が高く在留日本人間にも聞えていたので、就任の風説あるや

学堂の面々は皆小説家の提調を迎うるを喜ばなかつた。就なかんずく中、

総教習稲田穰の如きは当初のつけから不信任を公言して抗議を持出そう

とした。然るにいよいよ新任提調として出頭するや、一同は皆瀟し

洒ようしやたる風流才人を見るべく想像していたに反して、意外にも

状じようぼう貌かいい魁偉なる重厚沈毅ちんぎの二葉亭を迎えて一見忽ち信服してし

まつた。

川島の妹婿たる佐々木照山も蒙古から帰りたての蛮骨稜々とし

て北京に傲睨していた大元氣から小説家二葉亭が学堂提調に任せ

られたと聞いて太いたく激げつこう昂し、虎鬚逆立こぜんさかだつて川島公館に怒鳴り込

んだ。「小説家を提調にしてどうする」と厲れいせい声川島に喰かつて蒐かると、「先まア左とも右かくも一度会つて見るサ」といわれて川島の仲介で二葉亭と会見し、鼎座ていざして相語つて忽ち器識の凡ならざるに嘆服し、学堂のための良提調、川島のための好参謀を得たるを満足し、それから以来は度々往来して互に相披瀝して国事を談ずるを快としたそうだ。

二葉亭の提調生活は当時私に送つた次の手紙に髻ほうふつ髻ふつとしておる。

拝啓、今日は支那の十二月二十八日にて学校も冬期休業中ゆゑいたつて閑散なるべき理窟りくつなれど小生の職務は学堂庶務會計一切の事宜を弁理するにありと支那流にては申す職掌ゆゑ

日曜も祭日も滅茶苦茶に忙がしく、一昨夜なども徹夜していはゆる事宜を弁理候始末ほとほと閉口^{いたし}致候うちに自ら一種のおもしろみさすがになきにしもあらず、このおもしろみ読書の面白味にもあらず談理のおもしろみにもあらず一種^{へんてこ}変挺なおもしろみに候、小生^{おも}惟ふに学者の樂しむ所は理のおもしろみ、詩人の樂しむ所は情のおもしろみ、事務家の樂しむ所はactionのおもしろみ、事の趣にあらんか、元来当学堂は表面は清国の一学堂なれど裏面は日本の勢力扶植の一機関たれば自ら志士集合所の如き趣ありて公使館あたりの純然たる官吏社会より觀^みれば頗る危険の分子を含みたる一団体の如く目さるる傾^{かたむき}有^{これあり}之、ために随分迷惑を感じ候事も有之候へ

ど、そこが即ち一種の面白味の存する所にて学堂の仕事常に必しも学堂らしからず、時ありて梁山泊の豪傑連が額を鳩めあつて密ひそかに勢力拡張策を講ずるなど随分変挺へんてい来な事ありてその都度提調先生私ひそかに自ら当代の蕭しょう何かを以て処おるといふ、こんな学堂が世間にまたとあるべくも覚えぬ候、然れどもおもしろみのある所はまたくるしみの伏在する所にてその間一種いふべからざる苦痛も有之、この苦痛最初はいたって軽微なりしも仕事に深入すればするほど重かつ大になりゆきて時には殆んど耐へがたき事も有之候、小生の力よ能くこの苦痛に克かち四圍の困難を排除する事を得ば他日多少の事功を成就し得んも、この苦痛と困難とに打負くれば最早それまでにて滅茶々

々に失敗致すべく、さうなつたら已むを得ず日本へ遁歸り
 て再び生命を一枝の筆に托せざるを得ざるべきも、先づそれ
 までは死力を尽して奮闘の覚悟に候、北京の町の汚なさお話
 になつたものにあらず、宮中廁かわやと申候共同便所の如きもの往
 来の両側に処々散在すれども日本の共同便所と同日に談ずべ
 くもなし、ただ大道上に一空地を劃し低き土壁を繞めぐらしたる
 のみにて糞壺くそつぼもなければ小便溜だめもなく皆垂流たれながしなり、然
 れども警察の取締皆無のため往来の人随所に垂流すが故に往
 来の少し引込みたる所などには必ず黄なるもの累々として堆
 く、黄なる水湛たんとして窪くぼみに溜たまりをりて臭氣紛々として人に
 逼せまる、そのくせ大通にあつては両側に櫛しつ比せる商戸金色燦さんら

爛らんとして遠目には頗る立派なれど近く視みれば皆芝居かきわりの書割ぜん然

たる建物にて誠に安ツほきものに候、支那は爆ばく竹ちくの国にて

冠婚葬祭何事にもこれを用ゐ、毎夜殆んどパチパチポンの音

を聞かざるはなし、日本の花火はこれが進化したるものには

あらざるべきか、その他衣食住において日本に類似せる点多

く、さすが昔は東洋文明の卸おろ元しもとたりし面影どこかに残り

をり候——

天あつ晴ばれ東洋の舞台の大立物おおだてものを任ずる水滸伝的豪傑が寄たかつて集

つて天下を論じ、提調先生こうぜん昂然として自ら蕭何を以て処るとい

う得意の壇場が髣髴としてこの文字の表に現われておる。

眞実、提調時代の二葉亭は一生の中最も得意の時であつた。俸

禄も厚く、信任も重く、細大の事務ことごと尽く掌裡ことごとに歸して裁断を待ち、
 監督川島不在の時は処務を代理し、隠然副監督として仰がれてい
 た。然るにこの得意の位置をどうして抛棄するようになった乎か、
 その原因が判然しないが、左とに右かく止むに止まれない或る事情が
 あつて、監督川島及び僚友が頻りに留任を勧告するをも固く謝し
 て、決然辞任して歸朝した。この間の事情は当時の消息を知るも
 のの間にも種々の説があつて判然しないが、仮に川島あるいは僚
 友との間に多少の面白からぬ衝突があつたとしても、その衝突は
 決して辞職に値いするほどの大事件ではなかつたらしい。ツマリ
 二葉亭の持もち前まえの極端な潔癖からしてそれほどでもない些細ささいな事
 件に殉じて身を潔くするためらしかつた。二葉亭自身もこの事に

ついでには余り多く語らなかつた。「腹を立てるほどの事でもなかつたので、少^ちと早まり過ぎたのサ、」とばかり軽くいつていた。

間もなく日露の国交が破裂した。北京に在留中から露西亞の暴状を憤つて、同志と共にしばしば公使館に詰掛けて本国政府の断乎たる決心を迫つた事もあり、予^{かね}てからこの大破裂の生ずべきを待設けて晴れの舞台の一役者たるを希望していたから、この国交断絶に際して早まって提調を辞して北京を去つたのを内心窃^{ひそ}かに残念に思っていたらしかつた。「こう早く戦争が初まるなら最^もう少し北京に辛抱しているのだった、」とは開戦当時私に洩らした述懐であつた。

十一 朝日新聞社に入る

北京から帰朝したのは三十六年の七月で、帰ると間もなく脳貧血症に罹^{かか}つて田端^{たばた}に閑居静養した。三十七年の春、日露戦争が初まると間もなく三月の初め内藤^{ないとう}湖南^{こなん}の紹介で大阪朝日新聞社に入社し、東京出張員として東露及び満州に関する調査と、露国新聞の最近情報の翻訳とを担任した。満洲及び北京から帰朝したての意気込みもあり、豊富に資料も蓄えていたし、この調査には頗^{すこぶ}る興味を持って大に満足^{おお}して職務を服した。

然るに新聞紙の材料は巧遅なるよりは拙速を重んじ、堂々たる大論文よりは新鮮なる零細の記事、深く考慮すべき含蓄ある説明

よりは手取早く呑込む事の出来る記実、嚙占めて益々味の出るものよりは舌の先きで嘗めて直ぐ賞翫されるものが読者に受ける。新聞紙の寿命はただ一日であつて、各項記事に対する読者の興味を持つはただ二分間か三分間である。この二分間三分間の興味を持たしめるのが新聞記者の技倆であつて、十日一水を描き五日一石を描く苦辛は新聞記事には無用の徒勞である。この点において何事も深く考え細さに究め右から左から八方から見一分の隙もないまでに作り上げた二葉亭の原稿は新聞材料としては勿体なさ過ぎていた。折角苦辛慘澹して拵え上げた細密なる調査も、故池辺三山が二葉亭歿後に私に語つた如く参謀本部向き外務省向きであつて新聞紙向きではなかつた。例えば当時『朝日

新聞』に連掲された東露及び滿洲輸送力の調査の如きは參謀本部の当局者をさえ驚嘆せしめたほどに周到細密を究めたが、読者には少しも受けないで誰も振向いても見なかつた。新聞紙は一に読者の興味を標準として材料の価値を定めるゆえ、如何なる貴重の大論文でも読者の大多数が喜ばないものは編輯局もまた冷遇する。折角油汗を流して苦辛した二葉亭の通信がしばしば大阪の本社で冷遇されて往々没書となつたのは、二葉亭の身にすれば苦辛を認められない不平は道理であるが、新聞記事としては止むを得なかつたのだ。加うるに東京出張員とはいいいながら東京に定住して滅多に大阪へ行かなかつたから、自然大阪本社との意志の疎通を欠き、相互の間に面白からぬ感情の行違いを生じ、或時は断然辭職

するとまで憤激した事もあった。この間に立つて調停するかじとり 楫取やく役を勤めたのは池辺三山であつて、三山は力を尽して二葉亭を百方慰撫いぶするに努めた。が、二葉亭が自ら本領を任ずる国際または経済的方面の研究調査にはやはり少しも同感しないで、二葉亭の不平を融和するかたわ旁ら、機会あるごとに力を文学方面に伸ばさしめようと婉えん曲きよくに懇し憑ようした。二葉亭は厚誼こうぎには感謝したが、同時に頗るあきた慊あらなく思つていた。

が、三山の親切に対して強しいて争う事も出来ずに不愉快な日暮す間に、大阪の本社とは日に乖離かいりするが東京の編輯局へは度々出入して自然親したしみを増し、折々編輯を助けて意外な新聞記者的技倆を示した事もあつた。ポーツマウスの条約に拳国の不平が沸騰し

た時に偶然東京朝日の編輯局で書いた「ひとりごと」と題する桂かつら首相の心理解剖の如きは前人未着手の試みで、頗る読者に受けたもんだ。(この一編は全集第四卷に載つておる。)あるいは前人未着手でないかも知れぬが、これほど巧みにこれほど小気味能よく窮所を穿うがつたものは恐らく先人未言であつたらう。二葉亭の直覺力と洞どう察さつ力りきと政治的批評眼とがなければとても書けないものであつた。あるいは不満足なる媾こう和わに憤慨した余りの昂奮で筆が走つたので、平素の冷静な二葉亭ではかえつて書けなかつたかも知れない。こういう方面に専もつら力ちからを注いだなら新聞記者としてもまた必ず前人未拓の領土を開き得たらうと、朝日の僚友は皆二葉亭が一度ぎりでこの種の試みをやめたのを惜んでいた。が、二葉

亭はかえつてこれを恥じて、「あんな軽けいちよう 佻まねな真似をするんじゃないやなかつたつけ、」と悔いていた。

十二 『其面影』と『平凡』

その中うちに戦争は熄やんだ。読者は最早露西亞や満洲の記事には飽き飽きした。二葉亭の熱心なる東露の産業の調査は益々新聞に向かなくなつた。そこで三山初め有力なる朝日の社員は二葉亭をしていよいよ力を文学方面に伸ばさしめようと百方勸説した。その度毎たんびに苦い顔をされたが、何遍苦い顔をされても少しも尻しりごみ込こまないで口を酸すくして諄じゆんじゆん々々と説得するに努めたのは社中の弓ゆげた

削田秋江しゅうとうこうであつた。秋江は二葉亭の熱心なるアドマヤラーの一人として、朝日の忠実なる社員として、我わがまま儘な華族の殿様のお守りをするような氣になつて、氣を長くして機嫌を取り取りとうとう退のつびき引ならぬ義理づくめに余儀なくさしたのが明治三十九年の秋から『朝日』に連載した『其面影』そのおもかげであつた。続いて翌年の十月は『平凡』を連載して二葉亭の最後の文藻ぶんそうを輝かした。この二篇の著わされたのは全く秋江の熱心なる努力の結果であつた。

有体ありていにいうと『其面影』も『平凡』も惰力的労作であつた。勿論、何事にも真劍にならずにいられない性質だから、筆を操とれば前後を忘れるほどに熱中した。が、肝腎かんじんの芸術的興味が既とつく

の昔に去っていて、気の抜けた酒のような気分になっていたから、
苦辛くしんしたのは構造や文章の形式や外殻の修飾であつて、根本の内
容を組成する材料の採択、性格の描写、人生の観照等に到つては
『浮雲』以後の進境を見る事が出来なかつた。

殊に『其面影』は二十年ぶりの創作であつたから、あたかも処
女作を発表する場合と同じ疑懼ぎくしん心が手伝つて、眼が窪み肉が瘠やせ
るほど苦辛くしんし、その間は全く訪客を謝絶し、家人が室に入るをす
ら禁じ、眼が血走り顔色が蒼あおくなるまで全力を傾注し、千鍛万練
して日に幾十遍となく書き更あらためた。それ故とかくに毎日の締切時
間を遅らしがちなので、編輯局から容子を見届けに度々社員を派
したが、苦辛惨憺する現状を見るものは誰でも気の毒になつて催

促し兼ねたそうだと。池辺三山が評して「造物主が天地万物を産出うみだす時の苦みくるし」といったは当時の二葉亭の苦辛を能く語っておる。が、苦辛したのは外形の修辞だけであつて肝腎の心棒が抜けていたから、二葉亭に多くを期待していたものは期待を裏切られて失望した。

『其面影』を発表するに先だちて二葉亭は新作の題名について相談して来た。「二つ心ふたはあと」とか「心くずしはあと」とか「新紋形二つ心はあと」とかいうような人情本臭い題名であつて、シカモこの題名の上ふたどもえに二ツ巴の紋を置くとか、あるいは「破れやウイオリノ」という題名として絃いとの切れたウイオリンの画の上に題名を書くというような鼻持かびくさならない黴臭い案だつたから、即時にドレもこれも都々逸どどいつ

文学の語であると遠慮なく貶けなしつけてやった。かれこれ往復二、三回もした、最後に『其面影』でモウ我慢してくれといつて来た。この相談を受けた時、二葉亭の頭の隅すみツコにマダ三馬さんばか春しゅん水すいの血が残つてるんじゃないかと、内心成功を危ぶまずにはいられなかつた。

いよいよ『其面影』が現れて、回一回と重ねるに従つて益々この懸念が濃くなつた。『其面影』の妙処というのは二十年前の『浮雲』で味あじわわされたものよりもヨリ以上何物をも加えなかつた。加しかのみ之ならず『浮雲』の若々しさに引換えて極めて老熟して来ただけそれだけ或る一種の臭みを帯びていた。言換えると『浮雲』の描写は直線的に極めて鋭どく、色彩や情趣に欠けている代りには

露西亞の作風の新しい匂においがあつた。これに反して『其面影』の描写は婉曲なまぬるに生温なまぬるく、花やかな情味に富んでる代りに新しい生氣を欠いていた。幸田露伴こうだろはんはかつて『浮雲』を評して地質の断面図を見るようだといつたが、『其面影』は断面図の代りに横浜出来の輸出向きの美人画を憶おもいだした。更に繰返すと『其面影』の面白味は近代人の命の遣やり取とりをする苦くるみの面白味でなくて、渋い意気な俗曲的の面白味であつた。

『平凡』は復活後の二度目の作であるだけ、『其面影』よりは筆が楽に伸のびびりしておる。無論『其面影』と同じ洗鍊を経たので、決して等閑なおよに書きなぐつたのではないが、『其面影』のような細かい斧鑿ふせくの跡が見えないで、自由に伸のびび伸のびびした作者の洒落しやく

な江戸ツ子風の半面が能く現れておる。つまり『其面影』の時は「文人でない」といいつつも久しぶりでの試みにおの自ずと筆が固くなって、余りに細部のちようたく雕琢にコセコセしたのが意外のわずら累いをした。が、『平凡』の時は二度目の経験で筆が練れて来たと同時に「文学はドウでも宜いい」という気になって、技術の慾を離れて自由に思うままを發揮したから、前者に比べると荒削りではあるが活き活きした生氣に富んでおる。文人としての二葉亭の最後を飾るに足る傑作である。

が、いずれも『浮雲』の情力的労作であるは争われなかつた。

『浮雲』以後の精神的及び物質的苦悶に富んだ二葉亭の半世の生活からは最少もすこし徹底した近代的悲痛が現れなければならぬはず

であつたが、案に相違して極めて平板な不徹底な家常茶飯的葛藤しか描かれていなかつたのは畢ひつきよう 竟作者の根本の芸術的興味が去つてしまつたからであらう。

十三 第二期の失意煩悶

朝日社内における葛藤不平・國際的危機・『平凡』前後・實際的抱負

が、それにもかかわらず、世間は盛んに嘖々さくさくして歓迎し、

『東朝』編輯局は主筆から給仕きゆうじに到るまでが挙こぞつて感歎した。

前には満蒙に関する二葉亭の論策研究を虐待した『大朝』の編輯

局が二葉亭の籍が大阪にあるを名として当然大阪の紙上にも載すべきものだとして抗議を持出した。各文学雑誌は争って文学及び思想に関する論文または談話を請うて載せ、社会の公人としての名は益々文人として輝いた。

二葉亭は益々不平だった。半世の夙志しゆくしが総て成らずに、望みもしない文人としての名がいよいよ輝くのが如何にも不愉快で堪たまらなかつた。が、世間は如何に見ようとも、自分の使命は国際的舞台にあるをあくまでも任じて、少しも志望を曲げずに極東時局に関する内外の著書は得るに随したがつて精読し、内外新聞の外交に関する事項は細つぶさに究めて切抜きを保存し、殊に『外交時報』は隅から隅までを反覆細読していた。（二葉亭は『倫敦タイムス』ロンドン

『ノーウ・オウレーミヤ』 『モスコ・ウエドモスチ』等の英露及び支那日本の外字新聞數十種に常に眼を晒さららしていた。『外交時報』は第一号から全部を取とり揃そろえて少しも座右から離さなかつた。)

かくの如く全力を傾倒して国際問題を鋭意研究したのは本もと本と青年時代からの夙志であつたが、一時人生問題に没頭して全く忘れていたのが再燃したには自ずから淵えんげん源がある。日清戦争の三国干渉の時だつた。或る晩慨然として私に語つた。「日本はこれから先き世界を対手あいてとして戦う覚悟がなけりやアならん。東洋の片隅に小さくなつて蹲踞うずくまつてるなら知らず、聊いささかでも頭角を出せば直ぐ列強の圧迫を受ける。白人聯合して日本に迫るといふ

ような事が今後ないとは限らん。それも圧迫を受けるだけなら、忍んで小さくなって辛抱がまん出来ない事もなかるうが、圧迫が進んで侮辱となり侵略となつたらドウする。国際公法だの仲裁条約だのというはまさかの時には何の役にも立たない空理空文である。歐洲列強間の利害は各々相扞格あいかんかくしていても、根が同文同種同宗教の兄弟国だから、率いざとなれば平時の葛藤を忘れて共通の敵たる異人種異宗教の国に相結あんで衝あたるは当然あり得べき事だ」と、人種競争の避くべからざる所以ゆえんを歴史的に説いて「この覚悟で国民の決心を固め、将来の国是こくせいを定めないと、何十年後に亡国の恨みがないとも限らない、」と反覆痛言した事があつた。二葉亭の青年時代の国際的興味が再び熱沸して来たのはその頃からで、この憂

国の至誠から銳意熱心に東洋問題の解決を研究するので、決して
 大言壯語を喜ぶ単純なる志士氣質やあるいは国家を飯めしの種たねとする
 政治家肌からではなかつた。二葉亭の文学方面をのみ知る人は政
 治を偏重する昔の士族氣質から産出した氣紛れのように思うが、
 決してそんな浮いた泡のような空想ではなかつたので、牢乎ろうことし
 て抜くべからざる多年の根強い根柢があつたのだ。今にして思う
 と、三十年前に人種競争の止むを得ざる結果から歐亞の大衝突の
 当然来るべきを切言した二葉亭の巨眼は推服すべきものであつた。
 明治四十年の六月、突然急きゆうあ痾おに犯されて殆んど七十余日間病び
ようしよう牀しょうの人となつた。それから以後著るしく健康を損じて、平生
 健けん啖たんであつたのが俄にわかに食慾を減じ、或る時、見舞に行くと、

「この頃は朝飯はお廃止だ。一日に一杯ぐらいしか喰わない。夜もおちおち寝られない、」といった。「そりや不可ん。転地したらどうだい、神経衰弱なら転地が一番だ、」というとき、「転地なんぞしたって癒るもんか。社の者も頻りと心配して旅行しろというが、海や山よりは町の方が好きだ。なアに、僕の病気は何でもない、小説を書かないでも済むようにさえしてくれたらその瞬間に直ぐ癒ってしまう、」と喋って淋しく笑った。

一体が負け嫌いの病気に勝つ方で、どんなに苦しくても滅多に弱音を吹かなかつた。官報局を罷めてから間もなく、関節炎に罹つて腰が立たなかつた時も元氣は頗る盛んで、談笑自如として少しも平生と変らなかつた。その時から比べると、病気はそれほど

重くも見えなかつたが、元氣は全で失くなつて頗る銷沈しやうちんして
いた。豈夫まさかに嫌いな文学を強いられるばかりで病氣になつたと
も思わなかつたが、何となく境遇を氣の毒に思つて傷心に堪えな
かつた。

『平凡』の予告が現われた時、二葉亭が昔時から推奨したゴンチ
ヤローフの名作を憶い浮べて題名に興味を持ったので直ぐ手紙を
送つた。文句は忘れたが、意味はこうである。——『平凡』とい
う題名が如何にも非凡で面白い、（というのは前にもいった通り
『其面影』の題名に關して往復数回した事があつたからで、）定
めし面白いものであるうと樂たのみにしておる、左とに右かく現に文学を
以て生活しつゝある以上は仮令たと素志でなくても文学にもまた十分

身を入れてもらいたい、人は必ずしも一方面でなければならぬ
という理由はないから、文人であつて政治家あるいは実業家を兼
ねるのも妙であろう、政治あるいは外交に興味を有するが故に他
の長所である文学を廃するというは少しも理由にならない、かつ
いやしくも前途に平生口にする大抱負を有するなら努めて寛闊
なる襟度きんどを養わねばならない、例えば西園寺侯さいおんじの招宴を辞する
如きは時の宰相たり侯爵たるが故に謝絶する詩人的狷介けんかいを示し
たもので政治家的または外交家的器度ではない——という、こう
いう意味の手紙であつた。

無論この手紙を送つたのは二葉亭と議論する意つもりでも何でもなかつた。ただ『平凡』の題名に興味を持つた余りに筆を走らしたの

で、陶庵とうあん侯招宴一条の如きは二葉亭の性質として応じないのは百も二百も承知して少しも不思議と思つていないから、二葉亭の氣質を能く理解のみこする私が更あらためて争うような事は決して做しない。無論また数行の手紙で二葉亭を反省させあるいは屈服する事が出来ようとも思つていなかった。

然るにこの位な擲揄やゆうげん弄言は平生面と向つて談笑の間に言い合あうにかかわらず、この手紙がイライラした神経によつぽど触さわつたものと見えて平時いっにない怒気紛々たる返事を直ぐ寄越よこした。曰く、「平凡は平凡な也、それを強して非凡とおつしやるなら非凡でもよろし、されど平凡はやはり平凡也、首相の招待に応ぜざりしはいやであつから也、このいやといふ声は小生の存在を打てば響く声也、

小生は是非を知らず、可否を知らず、ただこれが小生の本来の面目なるを知りたる而已のみ、」云々と。それから最後に、「いざれその中に行く」と私が書いたに對して、「謀ぼうめん面は今時機あちに非ず、やがて折あるべし、」と結んで、手もなく当分面會謝絶を通告して来た。私が二葉亭から請取つた何十通の手紙の中でこれほど墨ぼ痕つこりんり淋漓とした痛快なものはない。青筋出して肝かん癩しゃく起した二葉亭の面めん貌ぼうが文面及び筆勢にありあり彷彿して、当時の二葉亭のイライラした極度の興奮が想像された。が、腹の立つたありのままが少しも飾られないで表白されているだけに、二葉亭の面目が歴ありあり々と最も能く現われていた。このいやというが二葉亭の存在を打てば響く声であるといったは何よりも能く二葉亭を説明し

ている。

二葉亭の文学嫌いは前にいったように単純な志士気質や政治家肌からではなかったが、それほどに懊惱おうのうしてジリジリと興奮するまで文学を嫌い抜いていたのは、一つは「このいやという存在の声」が手伝っていたのである。二葉亭は何事についても右といえば左、左といえば右という一種の執拗な反抗癖があつて、終局の帰着点が同一なのが明々白々に解つていても先ず反対に立つて見るのが常癖であつた。如何いかなる得意のものでも褒めほられると苦にがい顔をして、如何なる不得意のものでも貶けなされると一生懸命になつて弁明した。仮にもその欲する如くに政治家または実業家として相当の位置を作らしめたなら、その時は恐らく余は政治家に

非ず、実業家に非ずといったかも知れない。これが即ち長谷川辰之助のすけの存在の声であつたのだ。

尤も文学を嫌つて實際界に志ざしたは強ちあながこの一癖からばかりでなく、實際方面における抱負も或る人々の思うように万更まんざら詩人的空想から産出うみだしたユートピア的あるいは志士氣質の自大放言ではなかつた。ちよつと聞けば馬鹿々々しい浦塩の女郎屋論でも、底を叩くと統計やら報告やら頗る周到細密な数字的基礎があつた。殊に北京から帰朝した後の説には鑿々さくさく傾聴すべき深い根柢があつた。無論實際の舞台に立たせたなら直ぐ持前の詩人的狷介や道学的潔癖が飛出して累をなしたであろうが、それでももしよいよよその方面に驥足きそくを伸ぶる機会が与えられたら、強ち失敗に終る

とも定められなかつた、あるいは意外の功を挙げないとも計られなかつた。左に右く終に一回もこの自信ある手腕を試みる機会を与える事が出来ずにしまつたのは、二葉亭自身の一生の恨事であつたのみならず、二葉亭の知友としてもまた頗る遺憾であつた。

十四 露国の亡命客及びダンチエンコ

その頃波ポーランド蘭の革命黨員ピルスウツキーという男が日本へ逃げて来て二葉亭を訪ねて来た。その外にも二葉亭を頼つて来た露国の虚無党亡命客が二、三人あつた。二葉亭は渠らのために斡あつせ旋してあるいは思想上多少の連絡ある人士または政界の名士に

紹介したり、あるいは渠らが長崎で発行する露文の機関雑誌を助成したり、渠らの資金を調達するために布哇ハワイの耕地の買手を捜したり、あるいは文芸上の連絡を目的とする日波協会の設立を計画したりして渠らのために種々奔走をした。二葉亭はかつてヘルチエンやビエリンスキーに傾倒して虚無党思想についての多少の興味をも持っていたから、帝国主義を懐抱して日本の膨脹を夢見つつも頭の隅すみの何処どこかで渠らと契合していたかも知れぬが、それ以外に渠らを利用して国際的芝居を一と幕出そうとする野心が内々あつたらしい。その頃北京時代の友人阿部精二へ送った手紙に、「シベリア西伯利より露国革命派続々逃込み、中には東京へ来るものも有これあり之候故、これらを相手に一と仕事と出懸でかけし処、相手がまるで

お坊ちゃんにて話にならず、たうとう骨折損ほねおりぞんとなりたり、今も

革命派の上京する者は必ず来つてあれこれと相談を掛け候へども最早相手にならない事に決し候、渠らは皆空論を以て事を成さんと欲する徒にて口舌以上の活動をせんといふ意なし、こんな事で何が出来るものかと愛想をつかしたる次第に候、実は最初は今度こそ一世一代の仕事といふ意気込で取掛けたれども右の次第にてこれもまた駄目となりたり、ああ心中の遺恨誰に向つて訴へん、この上は最早退隱の外なし、小説でも書いて一生を送るべく候、』とあるは多分この間の機微を洩らしたものである。が、露西亞の革命黨員を相棒に何をするつもりであつたらう。二葉亭は明石あかし中佐や花田中佐の日露戦役当時の在外運動を頻しきりに面白がついて

たから、あるいはソナ計画が心の底に萌きざしていたかも知れぬが、それよりはソナ空想を燃やして儘ままにならない鬱憤を晴らしていたのだろう。公平に見て二葉亭が実行力に乏しいのを軽侮した露西亞の亡命客よりも二葉亭自身の方がヨリ一層実行力に乏しかった。二葉亭では明石中佐や花田中佐の真似まねはとても出来ないのを自ら知らないほどのウツケではないが、そんな空言を叩よんどこいて抛なろなしの文学三昧に送る不愉快さを紛らすための空から氣き焰えんを吐いたのであろう。

明治四十一年の春、ダンチエンコが来遊した。二葉亭は朝日を代表して東道の主人となつて処々方々を案内して見せた。ダンチエンコは文人としては第二流であるが、新聞記者としては有さすが繫がに

露西亞有数の人物だけに興味も識見も頗る広く、日本の文人のよ
うな文学一天張の世間見ずではなかつた。随つて思想上に契合す
るものがあつてもなくても、毎日々々諸方を案内しつつ互に宏
博なる知見を交換したのは、あたかも籠かごの禽とりのように意気銷沈
していた当時の二葉亭の憂悶不快を紛らす慰藉いしやとなつたらしかつ
た。

ダンチエンコは深く二葉亭に服して頻りに露都への来遊を希望
し、かつ池辺三山及び村山龍平むらやまりゆうへいむかつに向て露都通信員の派遣を勧
告し、その最適任者としての二葉亭の才能人物を盛んに推奨した
ので、朝日社長村山も終に動かされてその提案に同意した。耆きばへ
婆扁鵲んじやくの神剤でもとても癒なおりそうもなかつた二葉亭の数年前か

ら持越しの神経衰弱は露都行という三十年来の希望の満足に拭うぬぐが如く忽ち搔消かきけされて、あたかも籠の禽が俄に放されて九天に飛ばんとして羽叩はばたきするような大元氣となつた。その当座はまるで嫁入咄きまが定つた少女のように浮き浮きと噪はしやいでいた。

十五 露都行及びその最後

露都行の抱負・入露後の消息、発病・帰朝

・終焉・葬儀

こう決定してからは一日も早く文学と終始した不愉快な日本の生活から遁のがれるべく俄に急せき立って、入露の準備をするために殆ほと

んど毎日、朝から晩まで朝野の名流を訪うて露国に関する外交上及び産業貿易上の意見を叩き、碌々家人と語る暇がなかつたほどに奔走した。

いよいよ新橋を出発したのが四十一年の六月十二日であつた。

十四日にあたかも露西亜から帰着した後藤男を敦賀に迎え、その

翌日は米原まいばらまで男爵と同車し、随行諸員を遠ざけて意見を交換

したそうだ。如何なる意見が交換されたかは今なお不明であつて、

先年追悼会の席上後藤男自らの口からもその談話の内容を発表す

る事は出来ぬといわれたが、左とに右かくこの会見よつに由て男爵の知遇

を得、多年の夙志しゆくしが男爵の後援で遂げられいとぐちような緒を得たのは

明らかであつた。

米原で後藤男の一行と別れて神戸へ行き、神戸から乗船して大連を経て入露の行程に上った。その途上小村外相の帰朝を大連に、駐日露国大使マレウイチの来任をハルビンに迎えて各々意見を交換した。これらの会見始末は精しく三山に通信して来たそうだが、また国際上の機微に渉るが故に世間に発表出来ないと言ふ三山はいつていた。この三山も今では易簣してしまつたが、手紙は多分三山の遺篋の中に残つてるかも知れない。

が、露国へ行つて何をするツモリであつた乎は友人中の誰にも精しく話さなかつたが、左に右く出発に先だつて露国と交渉する名士を歴訪し、更にその途上わざわざ迂回して後藤や小村やマレウイチと会見した事実から推しても二葉亭の抱負や目的をほぼ想

像する事が出来る。出発前数日、文壇の知人が催おした送別会の
テーブルスピーチ
 卓上演説は極めて抽象的であつたが抱負の一端が現れておる。
 その要旨を搔かいつま摘むところである。

「自分は平生露西亞の新聞や雑誌を読んで論調を察するに、露西
 亞人の日本に対する睚がいさい眦うらみの怨は結んでなかなか解けない。時来
 らば今ひと戦争しようという意気込は十分見えている。けだし白
 人種の異人種を征服するは征服されるものから見れば領土の篡さんだ
 奪つであるが、白人種の立場からいえば、人類の幸福のための未
 開の土地の開発であつて、露西亞の南下の如きも露西亞人は神の
 特別なる恩寵を受くるスラヴ人の当然の使命だと思つてもいるし、
 文明が野蛮に打勝つ自然の大法だとも信じている。それ故に露西

亞人の眼から見て野蠻国たる日本に露西亞が負けたのは英人がブ
アに負けたのと同様、^{ただ}畜に露西亞一国の不名誉ばかりじやない、
世界の文明国の前途のための由々^{ゆゆ}しき一大事である。このままだ
もし済ましたなら、白人の文明はあるいは黄人の蛮力に蹂躪され
て終には如何なる慘禍を世界に蒙むらすかも解らん。ツマリ黄人
の勝利は文明の大破壊であるから、このまま指を^{くわ}啣えて引込んで
る事は世界の文明のために出来ない。勝誇つた日本の羽翼いまだ
十分ならざる内に二度と再び起つ事の出来ないまでに挫^{ぶっくじ}折いて
置かねばならんというのは単に露西亞一国のためばかりでなくて、
世界の文明のため人道のためだというのが露西亞人の腹の底の覚悟
である。可^{よし}也、そつちがその了簡ならこつちもそのツモリで最^もう

一度対手になろうといたい処だが、一度の戦争は東洋問題を解決するため止むを得ないとしても、二度の戦争は残念ながら日本の国力が許さない。日本人としては日本の国力が十分恢かい復ふく出来るまでは何とかして二度の戦争はあらせたくないというのが当然の願いで、それには露西亞人がまだ知らない日本の文明の真相を理解させて、日本人はブア人のような未開人でないという事を十分会得させるが第一策だと思う。無論、そんな姑息こそくの方法では深い誤解を除く事はとても出来ないかも知れんが、少くも彼我国際間の融和を計るには日本の文明を紹介するが有力なる一手段である。自分が露西亞に行くのは朝日の通信員としてであるが、この機会を与えられたを幸いとして、及ばずながらも尽して見たい

と思うはこの方面の努力で、甚だ不完全であるが聊かの経験ある露西亜語を利用して日露国民相互間の誤解を釈き、再び不祥の戦争がなからしむるように最善の努力を尽したいと思う。自分の微力を以てしては精衛海を填むる世間の物笑いを免かれんかも知れんが、及ばずながらもこれが自分の抱懐の一つである、「云々。

果して二葉亭のいう如くその頃の日露国民間に暗雲が低迷していたか否かは別であるが、国家を憂うる赤誠はこの一場の卓上話の端にも十分現われておる。出発前暇乞いに訪ねてくれた時も、露国へ行けば日本に通信する傍ら露国の新聞にも頻々投書して日本の文明及び国情を紹介し、場合に由れば講演をも開く意だから、ついでには材料となるべき書籍を折々廻附してもらいたいといった。

私は大いに同感を表して、取敢えず手許に有合わした『開国五十年史』を贈り、註文次第何でも送ると快諾したが、露西亞へ着いてから尚だ一回も註文を受ける間もない中に不起の病に取憑とりつかれました。朝日の通信員としてタイムスのブローウイツやマツケンジーを期すると同時に日本の平和のための福音使ともなろうとしたらしかつたが、その抱負の一端だも実行の緒に就つく違いとまがない中に思わぬ病のために帰朝すべく余儀なくされた。

二葉亭は学生時代から呼吸器が弱かつた。自分でも要慎ようじんして痰たんは必ず鼻紙へ取つて決してやたらと棄すてなかつた。殊に露西亞へ出発する前一年間は度々病氣になつて著るしく健康を損じていた。この懸念される容体で寒い露国へ行くのは險けん呑のんだから一応

は健康診断を受けて見たらと口まで出掛つたが、幸いに何にも故障がなければだが、万一多少の故障があつたからツてこれがために多年の夙望しゆくぼうを思留おもいとどまりそうもなし、折角意気の旺盛おうせいなる目出たい門出に曇影を与うるでもないと思つて、多少は遠廻しに匂わして見たが、強ては余りに勧めなかつた。だが、こんなに早く不起の病の牀とこに就こうとも思わなかつた。

露都へ着いたのが四十一年の七月十五日であつて、着くと直ぐ、一と月経つか経たない中に神経衰弱に罹つてしまった。で、かれこれ半年近くも何にも做しないで暮して、どうかこうか癒り掛けた翌あくる四十二年の二月十四日、ウラジミル太公の葬儀を見送るべく、折からの降りしきる雪の中を行列筋の道端みちばたに立っていると、

何しろ露西亞の冬の厳しい寒さの中を降りしきる雪に打たれたのだから、病^{やみあが}上りの身の何とて堪えらるべき、忽ち迷眩して雪の上に卒倒した。同伴の日本人の誰彼れは驚いて介抱して直ぐ下宿に連れて戻ったが、これが病みつきとなつて終に再び枕^{まくら}が上らなくなつてしまった。その果^{はて}がとうとう露人の病院に入院して肺結核という診断を受け、暫らくオデツサあたりに転地するかさなくば断然帰朝した方が上^{じょうふんべつ}分別である、医師からも朋友からも切に忠告された。

この忠告を受けた時の二葉亭の胸中^{ばんこく}万斛の遺憾苦悶は想像するに余りがある。折角^{こころ}爰まで踏出しながら、何にもしないで手^{むなしゆ}を空うしてオメオメとどうして帰られよう。このまま縦^{たとい}令露西亞の

土となろうとも生きて再び日本へは帰られないと駄々を捏ねたは決して無理はなかった。が、このまま滞留すれば病気は益々重るばかりで、終には取返しが付かなくなるのが看え透いていながら万に一つ帰朝すれば恢復する望みがないとも限らないのを打棄つて置くべきでない、在留日本人の某々等は寄つて集つて帰朝を勧告した。初めは何といつても首を振つて諾かなかつたが、剛情我慢の二葉亭も病には勝てず、散々手古摺らした挙句が抛るなく納得したので、病気がやや平らになつたを見計らつて大阪商船の末永支配人が附添い、四月五日在留日本人の某々に送られて心淋しくも露都を出発し、伯林を迂廻して倫敦に着し、郵船会社の加茂丸に便乗したのが四月九日であつて、末永支配人に

船まで送られて、包むに余る万斛の感慨を抱きつつ心細くも帰朝の途に就いた。

初めいよいよ帰朝と決するや、西^{シベリア}比^ア利^ア亜^線を帰る乎^か、あるいは倫敦へ出て海路を取る乎というが友人間の問題となつたそうだ。その結果が短距離の西比利亚線を棄ててわざわざ遠廻りの海路を択ぶに決したのは、寒い西比利亚線を行くよりは船で帰るが海気療法ともなるという意見が勝つたからだそうで、不思議に加茂丸へ移乗した時は担架で運ばれたほどの重態が出帆してから次第に元気を恢復して来た。末永大阪商船支配人の特別の依頼といい、朝日の記者、名誉ある文人としての名は事務長を初め船員が皆知っていたから、船医の外に特に一名の給仕を附^{つきそ}添として手厚く

看護し、この元気なら滞りなく無事に帰朝出来そうだと一同安心して大いに喜んでいた。然るにポルトセイドに着き、いよいよ熱帯圏に入ると、氣候の激変から病が俄に革あらたまつて、コロンボへ入港したころは最早たの頼少あくなになつて来た。

電報は櫛くしの齒を引く如く東京に発せられた。一電は一電よりも急を告げて、帰朝を待侘まちわびる友人知己はその都度々に胸を躍らした。

五月十日、船は印度洋に入った。世界に著しるき澎ほう湃はいたる怒濤が死ぬに死なれない多感の詩人の熱悶苦吟に和して悲壮なる死のマーチを奏する間に、あたかも夕陽いりひに反映てりかえされて天も水も金こん色じきに彩いろどられた午後五時十五分、船長事務長及び数百の乗客の限り

なき哀悼悲痛の中にとりま圍繞かれて眠るが如くに最後の息を引取った。

五月十五日シンガポール新嘉坡に着いた。近藤事務長は土地の有志と計り

て、事務長以下十数人、遺骸むくろを奉じて埠頭ふとうを去る三哩マイルなるパセパ

ンシヤンの丘きゆうてん巔ねんげーに仮の野辺送りをし、日本の在留僧釈梅仙を

請じてねんげー懇ろに読経供養し、月白く露深き丘の上に遥はるかに印度洋の

とうとう鞆まきたる波濤を聞きつつ薪まきを組上げて茶毘だびに附した。一代の詩

人の不幸なる最後にふさわしい極めて悲壮沈痛なる劇的光景であ

った。空しく壮凶を抱いて中途にして幽冥ゆうめいに入る千秋の遺恨は

死の瞬間までも悶もだえて死切れなかつたろうが、生中なまなかに小さい文

壇の名を歌われて枯木かれきの如く畳の上に朽ち果てるよりは、遠くヒ

マラヤの雪巔を觀望する丘の上に燃ゆるが如き壮志を包んだ遺骸

を赤道直下の熱風に吹かれつつ茶毘に委したは誠に一代のヒーローに似合わしい終焉しゆうえんであつた。

遺骨が新橋に帰着したは五月三十日で、越えて三日葬儀は染井墓地の信照庵に営まれた。会葬するもの数百人。権門富貴の最後の儀式を飾る金冠しゆうふく 繡服の行列こそ見えなかつたが、皆故人を

尊敬し感嘆して心から慟哭どうこくし痛惜する友人門生のみであつた。

初夏はつなつの夕映ゆうばえの照り輝ける中に門生が誠意を籠めて捧ささげた百ひやく日紅樹下に淋しく立てる墓標は池辺三山の奔放淋漓りんりたる筆蹟

にて墨黒々と麗わしく二葉亭四迷之墓と勒ろくせられた。

三山は墓標に揮毫きんごうするに方あたつて幾度も筆を措いて躊躇ちゆうちよした。

この二葉亭四迷は故人の最も憎める名であつた。この名を墓標に

勒するは故人の本意でないかも知れぬので、三山は筆を持つて暫らく沈吟ちんぎんしたが、シカモこの名は日本の文学史に永久に朽ちざる輝きである。二葉亭は果して自ら任ずる如き実行の経綸家であつた乎否かは永久の謎なぞとしても、自ら屑いさぎよしとしない文学を以てすらもなおかつかくの如く永久朽ちざる事業を残したというは一層故人の材幹と功績の偉なるを伝うるに足るだろう。と、三山は終に意を決して二葉亭四迷と勒した。

以上はただ一生の輪廓を描いたに過ぎないが、人物と思想とは特に剖析細究しなくてもほぼ知る事が出来よう。文人としての二葉亭の位置の如何なるやは暫らく世間の判断に任ずとしても明治の文壇に類の少ない飛離れた人物であつたはこの白描のデッサン

を見てもおおよそ推測おしはかられよう。文人乎、非文人乎、英雄乎、
 俗人乎、二葉亭は終にその全人格を他ひとにも自分にも明白ひつに示さな
 いで、あたかも彗星の如く不思議の光こう芒ぼうを残しつつ倏しゅつ忽こつと
 して去ってしまった。渠かれは小説家でなかつたかも知れないが、渠
 れ自身の一生は実に小説であつた。

(明治四十二年六月記、大正十三年十月補修)

青空文庫情報

底本：「新編 思い出す人々」岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年2月16日第1刷発行

2008（平成20）年7月10日第3刷

底本の親本：「思ひ出す人々」春秋社

1925（大正14）年6月初版発行

初出：「一葉亭四迷」

1909（明治42）年8月1日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：川山隆

校正：門田裕志

2011年5月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二葉亭四迷の一生

内田魯庵

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>